
冷たい人形のほほえみを

ntaku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冷たい人形のほほえみを

【Nコード】

N1046Q

【作者名】

ntaku

【あらすじ】

修道院を追い出された元シスターのジゼルは偶然通りかかった貴族の館で働くことになる。不器用で雑用しかできない彼女だが、何とか使用人の生活にも慣れ、日々過ごしていた。

だが、自分を見つめる視線、貢献しているとは言えない働きぶり…そんな館で過ごす自分に徐々に違和感を覚えていく。そして館に残された一冊の日記から、自分に与えられた彼女は残酷な使命を知る。

【1章】私の居場所（前書き）

何文字くらいから長編なのかよく分らないですが、6万文字程度の一人称小説になります。

ジャンルはラノベといえはラノベ…中世っぽい世界のある少女が巻き込まれた一騒動を描きます。

派手なアクションとか戦闘とかはありません（笑）

あらずじ見て何となく面白そうと、ご興味があればぜひお読みいただきければ幸いです。

ちよつと長めになりますがお読みいただいて面白かった・つまらなかった・設定が…等、ご感想も頂ければ作者として最高です。では、

【1章】私の居場所

(0)

とりあえず断言してもいい。この世に神様なんかいない。

神に仕えるシスターの私が言うのだからそれは間違いない。

孤児院で一人寂しく育った私を、こんな雪の中でのたれ死させる

……そんな分かり易い悲劇を、主がお許しになることがあるのか――

「……って……」

何だかすごく悲しくなってきた。

「破門されて何言ってるんだか、私……」

私は仰向けのまま、くじいた自分の足首に目をやる。少し動かすだけでも痛みが走った。

土手から転げ落ちた先が雪だったのは不幸中の幸いだったが、あまりに惨めな自分の姿に立ち上がるという気力は既に失せていた。

「……お腹すいた……」

夕焼け染まる空が、何だか滲んできた。もう色々なことが無意味に思えてくる。

親代わりの司祭の顔が脳裏に浮かぶ。最期まで私を心配して……あなたは考えて行動しなさいと言われていた昔が何だか懐かしい。

確かに……後から馬車が来ると思ってた道を外した結果、土手から滑落したのだから、その言葉は当たっていたわけだ。

——そんなことだから教会からも追い出されて……

「……」

こんなことだったら……さっきの馬車にとびきりのお金持ちが乗ってるとか、その人に見初められるとか……そんなうまい話があるぐらい、人生平等に出来ていても良さそうである。

まあ自分は主に身を捧げているから、許されないことはあるが……
「ん」

破門されたから結婚は自由か——よし。

頭の中を色々妄想が駆けめぐる。

よしってなんだよ……

だめだ…頭がぼんやりしてよく考えがまとまらない——

「何でにやけてるんですかね…この娘」

頭上からおつとりとした声が聞こえてくる。

うつすら目を開けると、膝に手を当てお下げ髪の女性が心配そうにこちらをのぞき込んでいた。

ぱちりと二人の目が合う。

「…あつ」

何か返事をしようと思っても、うまく声が出てこない——

「これは……止血した方がいいわね」

この人…何言ってるんだろう…

少し意識がはつきりとして、私は上半身だけをゆっくりと起き上がる。

「とりあえず拭いた方がいいわ」

彼女はエプロンから取り出したハンカチを私の髪の毛に当てる。

頬を生暖かい感触が伝っていった。

「血……かあ」

ああ……額…切れてたんだ…

「あの…？」

「ちいいいいい！」

喉が破裂しかねないほどの絶叫を上げる私。

だめだつて、昔から血を見ると

——私、修道院を追い出されたのだから——

ぐらつと体が倒れ込む。なぜか知らないが、たぶん昔嫌なことでもあったのか、血を見ると失神する奇癖があるのだ。

「ちよっ…」

視界が黒く染まる。

……私は生の終わりを確信した——

(1)――

気がついたら全身を柔らかい感触が包み込んでいた。何となく自分が夢の中にいることは理解した。

だから荒唐無稽にあふれ出てくる情景も現実じゃない。

司祭の死後、修道院に入れられた私に向けられた軽蔑の視線。

そう、神に仕える人達が決して外では見せない姿。私に見せたのは、孤児である私への――

「……」

視界が徐々に鮮明になってくる。どうやらふかふかのベッドに自分は横たえられているようだ。

窓から差し込むまばゆい光が自分を襲い、急速に意識が覚醒してくる。

確か…土手から落ちて…あれ、前後の状況がよく分からない。

私は体を起こし周りを見渡してみた。

置物や掛けられたコートを見る限りここは女性の部屋のようだ。

持ち主の性格を表しているように、よく整頓されている。

私とは……大違いである。

例外は机に積まれた羊皮紙の山で、印章と達筆な文字から見るに契約書の類のようだ。

寝室だというのに棚には高そうな本があふれている。周りの様子から、臍氣に商人の家にでも担ぎ込まれたかと、私は思った。

ようやく体に力が戻ってくる感触を得て、私はベッドから降りる。

床に足が付くと、足首を布の感触が包み込んだ。寝間着のズボンが長すぎるのだ。

ぶかぶかの寝間着姿に私は首をかしげる。

自分の荷物袋に入れたものでは無く、この長さに合う身長といったら――

「ああ……」

……ようやく思い出してきた。確か、担ぎ込まれたんだ。

土手で気を失った後、あの馬車に乗せられ……

薄目で見た光景は、高台と大きな館。朦朧とする意識の中で、何かスープを飲まされたことも思い出した。

額に手を当てると傷はふさがっている。

手当を受けて体を拭かれて、無理矢理着替えさせられて——他にも誰かいたような気もするが——

「うーん……おかしいなあ……」

何かもつと重要なことがあった気がする。

私は反射的に首筋に手を当てた。

そう、朦朧とした意識の中で不思議に思ったことがあったんだ。

確か枕元に司祭服を着た人もいて私の首から——

「ああ！」

首筋に手をやるとそこにあつた刻印札がなくなっていた。

あれを勝手に外すと大変なことになるのに——慌てて私は辺りを見渡した。

「あら、目が覚めたのね」

部屋の扉を開けて、長身の女性が入ってきた。

お下げ髪……私をここに連れてきた人だ……

「……あの……」

「これですか？」

彼女の手元には探していたものが握られている。私は焦った。

普段から首にぶら下げているその小さな札には、名前と良くも悪くも自分の身分を示す記号が打ち込まれている。

あれがないとこの先、どこに行くにも困るのだ。

「どうしました？」

私の置かれた事情は知っているはずなのに、この人は面白そうにこちらを見つめている。

そもそも領主か司祭の立ち会いが無いのに外すことは重罪なのに

「…あれ？」

司祭——枕元にいたのは……いや…なんで？

「ジゼルさん、落ち着きましたか？」

「——？」

彼女は私の寝間着のボタンを付け直し、袖をまくっていた。だらけた身なりが引き締まり、動きやすくなる。

戸惑う私を尻目に、彼女はドアの方へ手をかざす。

「まずは起きて食事にしましょう。その後に一つずつ説明しますね」

(2)——

「ウィツ、ここで家事全般を取り仕切っています」

彼女に紹介された女性はぺこりと頭を下げた。二人とも同じような背格好だが、年齢はウィツさんの方が下のように見える。二十歳くらいか——知的なお姉さんといった感じた。

「ジゼルです…はじめまして」

私もぺこりと頭を下げた。

どこか冷淡な彼女の表情は、有無を言わさぬものがある。

そして整った前髪と、きりつと光る眼鏡がさらに彼女を印象づけていた。

「昨日あなたをお風呂に入れたのは私なんですけどね」

ウィツさんは苦笑する。

「…うつ…」

「無理はないですね、意識はあつて無いようなものでしたから」

下がった眼鏡を直しながら彼女は微笑んだ。きっと悪い人じゃないさそう…

「私は執事長のエリゼと申します。料理と……ここの執務を担当しています」

私を助けてくれた女の人は、穏やかを体現したかのような声と表情を持っている。長いお下げ髪が印象的だ。

どこことなく…私よりもシスターに向いているような、穏やかな雰

困気を持っている人だ。

続けて私は二人の格好を観察する。

灰色と白を基調としたエプロンドレスは微妙に作りが違うが二人の立場を表している。

絵に描いたような使用人達である。

うゝん…どうやらあの時うつすら思った妄想が体現したわけだ。

とりあえず金持ちの屋敷に拾われたことだけは確かなようである。

「…聞いてます？」

「ああ…すみません」

エリゼさんはにやかな表情を変えず私の前に紅茶を置いた。

朝食は修道院の薄味に慣れた私にしてみれば食べ応え満点だったが、少々の胃もたれも感じ始めている。

これで使用人の料理というのだから……こういう生活をしている人もいるんだなと、妙な感心をしてしまう。

「これですけど…」

エリゼさんは私の刻印札を無造作にテーブルに置く。やはり夢ではないようだ。枕元にいた司祭はこれを外していたんだ。

「もういらないものですから捨てておきます」

「……」

私は少し眉をひそめた。見ず知らずの私に…何故こんなことを…教会に属する者はその階級に応じた口ザリオが支給され、国境や街の関所を自由に越えることが出来る。

平民は財布や荷物袋に入る小さな身分票を生まれた国から渡され、それが身分を示すのである。

そして…身分の低い人間…例えば私のように破門された修道女や罪人は、誰が見て分かるように金属の板に身分が打刻された札を首から下げなくてはならない。

それがどこの国でも同じ決まりである。

どこに行くにも高い通行税が掛けられ、職にもまともに就くことが出来ない最下層の身分をそうやって晒す羽目になるのだ。

神様がいるとしたらずいぶんな仕打ちである…

「なんでこんな物を首から外すのに一軒家が建つ金がかかるんでしょうね…」

ウィツさんはテーブルに置かれた打刻札を手取る。

「あらウィツは知らないの？」

エリゼさんがちらりとこちらを見た。こちらに気を使っているのだろうか……

私は戸惑いながらも小さく頷いた。教会にいた身としては、「免罪符」の目的はその裏まで知っている。

「修道院に入れられる娘^こつていうのはね、大抵は後継者争いに絡まないように押し込められる貴族の娘なの。

だから必ずしも素行がいい訳じゃなくて、破門されることもあるでしょ？」

「はあ」

「そこで高い免罪符と一緒に戻され、それが教会の収入源にもなっているってことね」

一般の人にはあまり知られていない教会の裏事情を見事に総括するエリゼさん。ウィツさんも、なるほどというように感心していた。「でも自分の娘ならいざ知らず……こんな」

エリゼさんが唇に手を当てる。

「こんな捨て子ですか？」

自嘲気味に自分を指差す私。言わんとすることは分かるし、慣れていた。

親代わりの司祭が亡くなり孤児院から居場所の亡くなった私は、後任の司祭の紹介で修道院に入れられた。

しかしそこで待っていたのは執拗な嫌がらせである。生まれつき不器用で、要領悪い私は格好の標的になったわけだ。誰かがしでかした失態も全て私のせいになり……そう、そんな時に……教会で営む診療所で薬棚をひっくり返したのは――

うつ…思い出しただけで頭がくらくらしてきた。

「……」

「そんな暗い顔をしないで……」

いつの間にか呟いていた私の独り言にくすくすと笑うエリゼさん。
「私達の方で教会から免罪符を発行してもらいましたから、もうあなたは自由です。」

身分も平民に戻してあります。公爵の公認ですから正式な身分ですよ」

「そんなこと出来るんですか？」

驚いた。免罪符に加えて、新しい身分を発行するなんて、どれだけお金がかかるやら想像もつかない。

「造作もないですわ……ここは公爵の邸宅ですからね」

「えっ？」

「あなたを土手から担ぎ上げて馬車に乗せた後、公爵がこれを外すように指示されたんですよ」

「……」

私は言葉を失った。ただ気まぐれにしてはやることが大きすぎる。
「倉庫の骨董品が一つなくなりましたが、大した散財ではありませんん」

私の心情を察したのか表情一つ変えずエリゼさんが言う。

「それに今回の件を借金としてあなたに押しつけることはないと思います。そういう風に私が処理しましたから」

「でも……」

昔からただより高い物はないと言う。自分では到底持てない重荷を変わって持つてくれた——その真意が分からない。

何とも言えない気持ち悪さが私を襲う。

「その……公爵様は……」

「今はお会いになれません」

ウィッツさんは腕を組みながら言った。その声の調子に、瞬時に歓迎されていない雰囲気を感じる。昔から人のそういう機微には鋭いのだ。

「なんでこんなこと…」

「そうですね…理由は説明されていません」

エリゼさんは相変わらず微笑んでいた。他意は無さそうに…見える。

「グリ……つと、公爵は今、病に伏しています。」

そのうち紹介できると思いますよ」

そう言うときエリゼさんはカップに残った紅茶を飲み干した。

「さてと……とりあえず…あなたについてですが」

彼女はウィツさんを一瞥すると立ち上がった。

「特に指示は受けてませんが、しばらくここで働いてもらいましょう。私の権限で人は雇えますし、その方あなたも気が楽でしょう？」

私は強く頷いた。間髪を入れずにウィツさんが一枚の紙を差し出す。

「そこに名前を書いてくれれば、期限を定めずにこの家の使用人として雇われることになります。」

もちろん条件は公爵と相談しますが……とりあえず見習いとして私からお給料は出すことにしましょう」

エリゼさんが文章を指差しながら説明してくれた。私はどこか上の空だ。舞い上がる感情を…震える腕を押さえて私は署名する。

これで捨て子から破門された修道女を経て、初めて職に就けるわけだ――

(3)――

「着替えが終わったら声を掛けてください」

ウィツさんに連れて行かれたのは、普段は客間として使われている部屋ということだ。貴族や商人等向けでなく、家の修繕などに訪れる業者向けのなので、自分の分相応の造りにはなっているが、客間を自由に使っているのだから、ずいぶん豪気な話である。

「当面はそれ一着しかないので大事に着てくださいね」

渡された服に袖を通す私。髪飾りとして初めて付けるリボンがく

すぐたかった。

「教会では、どんなことしてたんですか？」

「掃除…洗濯…食事作りの一通りは………出来ます」

私は曖昧に答えた。出来るというよりは、やったことのあることと言った方が正確だからである。

「そうですか」

ようやく着替え終えた私は鏡の前でくると回ってみる。まるで別人のようだ。

「ここここ…しっかり留めてください」

ウィズさんが腰に手を回しエプロンを縛ってくれた。ほんのりと彼女の髪から上質の香水の香りが漂ってくる。

何だか自分まで上品になった気分になる。

「まずはこの館にある物を見てもらいましょう…ウィズも付いてきて」

「…はい」

私達はエリゼさんを先頭に台所を抜けて廊下に出た。台所や食卓、客室、書斎等、一階は公国の執務のための部屋と、使用人の生活のための寝室等が配置されている。

玄関は吹き抜けで空を見ることが出来た。

全体として採光に細かな配慮が成されていて、調度品と相まって明るい雰囲気醸し出している。

中でもピアノの置いてある客室は、私の目を輝かせた。

「この階段ですが…」

二階は公爵様の部屋があると言い私はエリゼさんか公爵様の許可がない限り上がってはいけないと言われた。

「上と地下の倉庫も含めて十五部屋あります。まあ公爵邸ですが田舎の町ですからこれでも規模は小さいんですよ」

…確かに私が住んでいた修道院よりは狭いが、あそこは数十人が暮らしている。ここは私を入れても四人…

「って…使用人の数、少なくないですか」

こういつ人達つて大勢の使用人を抱えている印象があつたのだが

……

「公爵様は少し気難しい方でして、信用できる人しか手元に置かないんです」

「……はあ」

エリゼさんの言葉に、私は少し違和感を覚えた。

「信用できるつて……私の何を持ってそんな……」

「修道院から来た娘に悪い娘はいませんよ。破門された経緯も想像はつきますし」

「……でも」

そう言われてもあまり信じることは出来なかった。

それぐらい身分を変えろということとは簡単に出来ることではない

……

「それに人手が少し足りなくなってきたところですから、ちょうどいいことは確かですよ」

エリゼさんはそつと私の肩にぽんと手を置いた。

「はい……」

とりあえず納得することにした。下手な勘ぐりを入れてやぶ蛇になることもないだろう。

「他に何か聞きたいことはありますか？」

今まで見てきた場所を思い出して少し考える私。そういえばこういう家に足りない物がもう一つあった。

「警備とかはどうしてるんですか……その女の人だらけだと泥棒とか来たら」

「ここは高台ですし、通じる道を兵士を使って塞げば狼藉者も入ってこれません。盗られて困るほど蓄財もしてません」

エリゼさんは気楽にのたまつた。調度品一つでもくすねればしばらく生活できる身としては、複雑な気分だ。

「それに彼女に護身術の心得があります」

話題を振られウィツさんはおどけるように構えてみせる。私にそ

の心得はないが、隙が無いように見える。

…力は無さそうだが、あまり喧嘩とかしたくない相手かもしれない…

「わ、わかりました…」

「ではこんなところでいいですね。この部屋から掃除を始めましょう」

「はい！」

私はやる気満点で元気よく答えた。

(4) —

「……」

「……」

二人の沈黙が部屋を支配する。

エリゼさんと別れ、ウィツさんと一緒に掃除を始めたのだが、私の元気が続いたのは三部屋目までだった。

これだけ広い屋敷になると日常の掃除と言ってもやることは多い。それに修道院のように人海戦術に任せるわけにもいかない。

調度品の扱い方にも一つ一つ注意点があり、神経をすり減らしていく。

「あつ……」

緊張疲れから注意散漫になった私は床に置いてあったバケツをひっくり返す。

……それも…これで二回目である。

「……」

「ごめんなさいっ！」

私は慌てて床を拭いた。大事に着てくれと言われた服のスカートをそれで濡らしたと気付いたのはその後だ。

「あつ……」

「ここはもういいです……」

私のあまりの醜態に呆れたように大きくため息を付くウィツさん。

「片付いたら洗濯をしましょう」

ウィツさんの声の調子は平静を装っていたが、微かに上がる肩を見るに、怒っていることは間違いないようである。

失敗しないようにびくびくと怯えていくうちに、私の動きはどんどんぎこちなくなっていく。今洗っているのは女性物の下着で、そこには昨日まで着ていた私の物もあった。

「あつ……」

お約束のように桶の中に洗剤を落としてしまった。

「……」

「……」

即座にウィツさんの視線が突き刺さる。

「すいません……」

その後も失敗続きの散々な仕事ぶりで、一日通して彼女の私への心証は相当悪くなったのは間違いない。

その日最後の仕事は台所での炊事だった。これはエリゼさんが取り仕切るので、あの視線からは少し解放される。

「ウィツもジゼルも何か疲れてない？」

「色々ありましたから」

冷たいウィツさんの声が私を責めるように響いた。

「そう？」

エリゼさんは気付かないのか、鼻歌交じりにスープを煮込んでいた。

「その皮を剥いてもらえるかしら」

「はい」

ジャガイモと包丁を手にする私。

「道化^{シエロ} じゃないんですから手を切らないでくださいね」

ウィツさんの声に私の手がビクリと震える。

指先を包丁が走るとうつすらと赤い物がしみ出してきた。

「ひいいい」

私の悲鳴とともに皿が床に落ちた。

バリンという音ともにウィツさんの歯ぎしりが聞こえてきた気がした。

「あなた…喧嘩売ってるんですか」

「ひいっ」

「…ここも追い出される…」

考えれば考えるほど恐い想像が頭をもたげる。

免罪符の代金返せと言われて、返せる当てもなく、どこか悪い人に身売りされ――

私の眼からはぼろぼろと涙がこぼれてきた。

「まあウィツったら、まあそんな恐い顔したらせつかくの美人が台無しですよ」

「…」

「わたし…」

自分の声が声になっていない。床にぺたりと張り付いた足は自覚できるほど震えていた。

「大丈夫よ、追い出したりはしないからね」

エリゼさんは間に入って私の頭を優しく撫でてくれた。

「人間何か取り柄はあるから」

それに、ちよつとドジなのも微笑ましいじゃない」

エリゼさんの言葉にウィツさんの口元がひくつと歪んだことを私は見逃さなかった。

「でも…掃除洗濯料理……ちよつと今は任せられないから…他に何かしていたことはない？」

ハンカチで私の涙をぬぐいながらエリゼさんが尋ねる。

「えっ…と…子供に歌ったり…本を読んであげたり……あと…」

孤児院育ちゆえ、孤児院の手伝いはよくやっていた。でもここで役立つ技量ではない。

「オルガン…弾けます…」

私は声を振り絞るように答えた。

「…？」

賛美歌を弾くオルガンなら、修道院でもその腕前を認められていた。

偉い司祭がやってくる安息日のお祈りにも指名されて賛美歌を弾いていた。

まあそれが新たな妬みの原因になってたりしたのだが…とりあえず自分の拠り所はそれしかない。

「では聞いてみましょう…ここにはピアノしかありませんが」

「え…今からですか」

ウィツさんが怪訝な表情を浮かべる。

「いいじゃない。近所迷惑にはなりませんから」

(5)――

スーブの火を止めてエリゼさんに連れて行かれたのは来客用の部屋である。私の部屋ではなく上客用の部屋で、広さも装飾もわけが違う。

ようやく泣きやんだ私は、初めて触れるピアノに慎重に触れてみた。

「これだけは壊さないくださいね」

エリゼさんが優しい声でからかってくれた。その声に悪意がないのはすぐに分かる。

「はい」

修道院での嫌な経験からか、悪意を持って…今日も自分が悪いとは言え、ウィツさんのように苛立ちを自分にぶつけてくる人の前では、どうも自制を失ってしまうのだ。

そんな私に氣遣ってエリゼさんは演奏が終わるまで黙っているようウィズさんにきつく命じていた。

「…よし」

大きく息を吸い、鍵盤を一音叩く。

ポンっと、オルガンよりも素早い立ち上がりで音が響く。これがすごくいい感触だった。

曲は頭にたたき込まれた賛美歌だが、今日は自分なりの変調も加えてみることにした。

少しテンポを上げて、私は指先に神経をとがらせる。もちろん「聴衆」の反応を見ることも忘れない。

破門されてから酒場で小遣い稼ぎに培った腕を全て見せなくてはならない。

「……」

ちらりと脇目を振ると、エリゼさんは感心しているようだ。

「……ふう」

あつという間に一曲が終わってしまった。

少し遅れてパチパチと拍手が響いてきた。

「すごい…これならお金が取れますわね」

「確かにこれなら遠方から奏者を呼ぶこともないですね」

そう言うウィツさんは無表情で私を凝視していた。

「……あの…どうでしょうか…」

「演奏は悪く無かったです」

ウィツさんは私から視線を逸らし、口をとがらせていた。

何を怒っていたんだろう……自分としてはいい演奏だったと思うんだけど……

「最近はお客さんが来ませんから…それほど役に立つとは言えません」
肩を震わせながら彼女は冷たく言い放った。

「だいたいあなたのせいで沢山お金を使いましたから、それぐらいの貢献じゃ足りません。」

鍵盤も激しく叩きすぎ、消耗を考えてください！」

彼女は立ち上がると苛立っているようにバタリと扉を閉めて出て行ってしまった。

残されたのは目を丸くした私と苦笑するエリゼさんである。

「気にしないで、素直じゃないから…あの娘」

「はあ……」

「私は最高と思いましたよ。出来れば毎日聞かせてくださいね」

エリゼさんはそう言う「ウィツをなだめに行く」と言ってやはり外へと出て行く。

とたんに部屋は静かになった。

緊張から解放され、体から力が抜けていく。

その後、もやもやとした気持ちを抱えながら食事を取りエリゼさんとお風呂に入ったら、もう眠気が最高潮に達していた。

「……ああっ」

思えばこの館での一日目は散々だった。

身分が一夜にして変わり、ここでもやっぱり私は役に立たず、ウィツさんの心証はどんどん悪くなっていく。エリゼさんは……逆に何でも許してくれるのが恐い。

そしてまだ見ぬ公爵は何でこんな私を……

まあ……考えても仕方がない――

私は疲れ切った体を横たえて眠りに付いた。

(6)――

「それで、どうするんですか」

「そうそう、昨夜一生懸命考えましたが……」

寝ぼけ眼で食堂にはいると二人はもう朝食を食べていた。

私は朝の低血圧と着替えに手間取り少し遅れたようである。

「……ジゼルさん」

ウィツさんが席に着いた私の腰の辺りにじろりと視線を向ける。

「うあ……すみません」

慌ててエプロンの紐を締め直すと私は既に用意された食事に手を付けた。

「……つと……話を続けますね」

エリゼさんは早々と食事を終えて紅茶を自分のカップに注いでいた。

「ジゼルの仕事なんですけど……」

その言葉に心臓がドキリとなった。いきなり深刻な話が襲ってきた。

たようだ。

「朝からそんな顔しないの。お払い箱にしようって話じゃないわ」
エリゼさんは笑った。

「あなたには裏庭の手入れを任せまようかと思えます」

「…そう来るとは思いましたが…反対です」

間髪を入れずウィツさんがガタリと立ち上がった。冷たい視線は私ではなく、エリゼさんに向かっている。

「あら、でもあの草むらは何とかしないといけないでしょ？」

庭つて…私は窓から外を見る。綺麗に整った庭がそこにあった。

「そっちは正面の庭ですよ。崖側の方に使われなくなったテラスがあります」

エリゼさんは反対側を指差した。そうそう、昨日廊下から見た景色の中に、草むらの姿があったことを私は思い出す。

「この一娘>>こ<<に庭の手入れなんか出来るんですか？」

「……修道院でも…そこを任されてました」

昨日と同じように曖昧に私は答えた。

「何かとやらかしたあげくに、でしょ？」

それぐらいはお見通しのようで冷笑を浮かべてウィツさんが言い放つ。だがすぐにエリゼさんにたしなめられると、彼女は席に戻った。

「いいんですか？」

怪訝そうにウィツさんが確認している。どうも信用されてない…

…ようである。

「私が決めました。反対するなら正当な理由でないと受け付けませんよ」

きっぱりと言うとエリゼさんは部屋を後にしてしまった。

「まあ、そこまで言われたら反対は出来ませんね。雇われた身では」
小声で何か呟くとウィツさんは私に顔を近付ける。

「あそこだけは慎重に手入れしてください。使用人ではあなたをかはえなくなります」

何やら意味深な言葉を私にささやくと彼女は仕事へ行ってしまった。

(7)――

慌てて食事を終えると、落とさぬよう冷や冷やしながら台所へ食器を片付けエリゼさんのところへ向かう。

その後連れて行かれたのは件の裏庭である。

そこには自分の胸元まで草が伸びている。一昨日の雪にもめげずに立つすきは、枯れかけてはいるものの、その存在を堂々と示している。

屋敷とは対称的な荒れ果てた庭に、私は呆れることしか出来なかった。

> i 1 7 0 6 6 ― 2 3 2 4 <

「二人だと、なかなかここまで手は回りませんからね……」

「はあ……」

エリゼさんが私の表情に苦笑している。

「好きにやってください。ここならどれだけ壊されても見えませんか」

……うう……もしかしたらエリゼさんにも信用されてないかも……

「お昼が出来たら呼びに来ます」

エリゼさんは鎌やほうきを置いて屋敷へ戻っていった。

「好きにやつてもと言われてもなあ……」

どこから手を付ければいいのか――

まず私は辺りを観察することにした。

草をかき分けながら庭を一周する。昔は手入れされていたのか、花壇や芝生の跡がある。

配置はなかなか考えられているようで、草を刈りその跡を戻すだけでも見栄えのよい庭が出来るだろう。

とりあえずその草刈りから始めよう……それなら何も壊さずに出来る。

自分の中に浮かんた情けない考えはさておいて、エリゼさんが残した手袋をはめると、

「あそこからだな……」

と、私はテラスに置かれたテーブルと倒れた椅子を元に戻し、鎌を掴んで草を刈り始める。

今は淡々とやることがあるだけで気分が落ち着く。

枯れかけの草はサクサクと切り取ることが出来、意外にも楽しくなってきた。

「うん、何か仕事してるみたい」

そんなどうしようもない独り言を呟きながら、一時間強で自分の部屋の面積ぐらいを草の支配から解放することが出来た。

「ふう……」

天候は汗ばむほどの陽気で、直射日光に照らされた頭がぼんやりしてきた。

エプロンドレスに麦わら帽子、手袋と頭にかぶる手ぬぐい。かなり情けない格好で日射しを防御したのだが、服の下は汗で濡れていた。

首筋をぬぐいながら立ち上がる。

空を仰ぐと見事な青空と……くろい……雲？

「あ……あれ……？」

同時にその時ぐらりと地面が揺れる。

うあ……

「つと」

突然体の傾きが止まった。自分の肩を誰かが掴んで……いる？

「大丈夫かい？」

か細い少年の声が私に問いかけてきた。

【2章】微かな残り香

(1)――

気がつくとい私は誰かに抱きかかえられていた。

「っと…結構、華奢なんだね…」

声の主はがっちり腕を回して私の体を支えつつも、小刻みに震えていた。慌てて私は体を起こす。

「なんかふらふらしてたから…とつさに支えたけど平気だった？」

「あっはい…ありがとうございます」

そう言いながら振り返ると、清廉とした顔立ちの少年が私を見て微笑んでいた。

たちまち私の顔が真っ赤に染まる。

「どうしたの？」

い…今、私、抱きつかれてた？

慣れない出来事に急に恥ずかしくなってきた。

…いやいや、倒れそうな私を支えてくれたただ、他意はないはず――

少し早鐘を打つ心臓を落ち着かせ私は少年の顔を見つめた。

「あなたは…」

「グリフ…一応、ここの主人ってことになってる」

日射しに顔を背けると彼はテラスの椅子に腰掛けながら言った。

声の調子からとつさに男の人と思ったのだが…彼はとても華奢に見える。

そして顔は青白く、どこか疲れているようにも見えた。

「じゃあ、あなたが…私を…その」

「うん」

言わんとすることを察したか、彼は頷いた。

「体の調子はどうだい？」

あの時の傷の跡は無いようだけど。」

「もう大丈夫です。それより公爵様の方が病に伏してると聞ききましたか…」

私がそう言うと、彼は小さな声で笑った。

「あの二人がそう言ったのかい？」

「はい」

「……確かに朝が弱くて外に出たがらなくて、仕事が出来ないことは病気だろうね」

なんと返していいだろう……しかも半分以上は、私にも当てはまる。

「朝からずっと草刈りしていたんだよね」

「はい…」

彼はテラスの天井を指差す。

「上から見ていたよ」

私が指差す方に向くとバルコニーと大きな窓が広がっている。カーテンをめくれば、確かに丸見えのようだ。

……余計に恥ずかしくなってきた。

「まあ、少し休もうよ」

公爵様は地面に置いたポットを持ち上げて、そこに塩を入れと私に差し出してくれた。

ぽかんと口を開けている間に椅子まで引かれ、彼は私に座るように促す。

…これではすっかり立場が逆である。

「あつ…ありがとうございます…」

修道院時代に習ったことを思いだし、優雅に頭を垂れると公爵様の隣りに小さくなって私は座る。

改めて近くで見るとやはりその顔はやつれたように見える。病気というのもあながち間違いではないようだ。

「どうしたの？」

私の視線に気付き彼は小さく微笑んだ。

「どうしてこんなことしてれたんですか…」

直接的な言葉を避け、私は首筋に手をやり、離す身振りを加えて見せる。

公爵様は少し考えるように目をつぶった。

「別に気にしなくてもいいよ…気まぐれみたいなものだからね」

「でも、公爵様！」

私はガタンと音を立てて立ち上がり、彼に顔を近付けた。曖昧な言葉にあまり納得がいかなかったからだ。

「待った」

彼は掌を私に突き出してその動きを静止させる。

同時に冷たい視線が送られる。

お…怒らせちゃったかな…？

「その公爵様は無し。ここでは僕はグリフで通ってるからね」

「……」

ん…そっち？

「堅苦しいのは嫌いだし、ここは君みたいな同年代がいないから窮屈なんだ」

そんな単純な物だろうか…彼の言い回しに裏を感じつつ、

「そんな理由ですか？」

と、慎重に尋ねる私。

公爵さ…グリフ…さんは、どこか遠い目をして口元を歪める。

「この椅子が使えるようになったのは久しぶりなんだ…」

そう言つと、しばらくの間お茶をすする音だけが辺りを支配した。なにかあの言わせぬ雰囲気には息を飲む。

「そうだね…」

僕としては他のことはいいから、ここの手入れをして欲しかったんだけど…」

「……」

「頑固な二人の前ではなかなか言えなくてね」
グリフさんの頬が緩む。

私は思わず頑固という言葉に拭きだした。

確かにウィツさんもエリゼさんも持つている雰囲気こそ違えど、自分がこうすると決めたら主人といえども曲げぬような人のようだ。「君を雇った理由はそれで十分かな？」

うれしそうな彼の顔を見て、私は確信した。

「ここは、グリフさんにとって大切な場所なんですね」

彼は一瞬驚いたように目を見開く。と、同時に唇を噛み締めた。

「うん……ここは……」

グリフさんは子供の頃の思い出と言いながら、

「昔はここでみんなでお茶会をしていたんだけど……」

それを呼び起こすように呟く。

館の住人全員が集まる庭、この場所の手入れに人を割けなくなり……もう何年も使われていない……それがとても残念——

そんな言葉の一つ一つから想いが伝わってくるようだった。

「そう、エリゼがお茶入れて、ウィツが歌って……」

一瞬、私は自分の耳を疑う。

……あのウィツさんが……歌？

「変な顔してるけど、どうしたの？」

「いや、ウィツさんの歌ってどんなのかなあ……と」

「彼女、すごく音痴だね。うまくなりたいて、涙混じりに歌うのは滑稽だよ」

その光景を想像してみる私。何やら微笑ましいような……怖いような——

「……聞いてみたいですね」

少し寒気を覚えながら私は呟いた。

あのウィツさんを馬鹿にしたように「滑稽」と……

でもグリフさんの言葉の響きには不快な感じはなく、どこか楽しそうだ。

その語り口に、何だかこっちまで楽しくなってきた。信頼している人しか置かないってのは……なんか、家族のように親しみを持っている人を選んでいるのかと私は思った。

「ただどあの二人は他にやることがあるって言って、ここを後回しにするんだ…」

まったく…僕が頼りないからって何一つここじゃ決めさせてくれないなんて——」

俯きながらブツブツ呟くグリフさんは何だか子供のように見える。実際、私と大した年の差はないのだろうか。

「はは…愚痴っぽくなっちゃったね……」

君も彼女が人見知りして大変だろう。でもいい娘だから心配しないでいいよ」

「はい」

彼の微笑みに、私にもこりと頬を緩ませた。

「これから頼んだよ…修道院から来た娘は有能だから二人を助けてあげて欲しい」

「が…がんばります」

何か過大な期待がかけられてる気もするが……

ガツカリされないようにするしかないようだ。

「折角だからこのテーブルも動かそうか…そっちの方が風が当たって気持ちいいしね」

「分かりました」

私たちは息を合わせてテーブルの端を掴んだ。

「よいしょと」

テーブルはちよつと重いが二人で足首ぐらいの高さまでは上げることが出来た。

「あ……」

と、私の顔を見たままグリフさんが硬直する。

あれ…？

「どうしました？」

突然ガタンと音を立ててグリフさんの体がテーブルに倒れ込む。

テーブルはひっくり返らなかったが、グリフさんは机に突っ伏したまま動かなかった。

「うあ……」

驚きの後、右腕全体に灼熱感が走った。

ポットが倒れ紅茶が私にかかったようだ。

「ご……ごめん」

すぐに平静を取り戻してグリフさんは起き上がった。

「……ちよつと立ちくらみがしたただよ」

そうは言つものの薄影に見える顔は、初めて見た時よりもさらに青白くなっていた。

「でも……でも私、……誰か呼んでくれます」

私はとりあえずエリゼさんのいる台所へ向けて走り出した。

(2)――

「まったく……体調悪いなら無理しないで下さい」

額に濡らしたハンカチをグリフさんに当てると、エリゼさんは私を指差した。

「あなたもあなたです」

いつになく厳しい口調に、私の体が強ばる。

「主人の体調管理も使用人の仕事のうちですよ！」

「すいませんでした……」

……エリゼさんに初めて怒られた。俯いた私は何も言い返すことが出来なかった。

確かに病気であるということも聞いていたし、顔色とかから配慮しなくてはいけなかった。

日射しのせいで私がめまいを起こしたんだし……

「彼女は関係ない。僕がやりたくてやったんだ」

少し弱々しい声でグリフさんが私をかばってくれた。エリゼさんは振り上げた拳を下ろされると、大きく息をつく。

「まあ……グリフさんが無理したなら……ジゼルのせいではないですね」
「……」

ちらりと目を遣られたウィツさんは、自分は関係ないと言わんば

かりに私のエプロンに付いた染みをたたき出していた。

「とにかく、この件は僕のせいだから――」

エリゼもそんな顔は止めてくれるかな」

「……はい……少し感情的になりすぎました」

エリゼさんは自分の掌で頬を押さえ表情を取り繕う。ようやく私に向けられていたおつかない雰囲気が消失した。

ようやくその場が収まると、今度の主題は私の服に移る。

「どう、染みになりそう？」

「エプロンはそのまま洗えばいいですけど……ジゼルさんの着てるのは」

ウィッツさんがため息混じりに私の服を見る。灰色であり目立たないが、腕全体に紅茶の染みは広がっていた。

「これも丸洗いしないと駄目でしょうね……」

私の袖を掴みながらウィッツさんが眉をひそめる。今まで着ていた服は地で汚れて捨ててしまったし、今は自分の私服がこれしかないということも問題を大きくしていた。

「ジゼルの私物は？」

「あの雪の中に埋もれていたのを忘れてきたんですよ、私が」

エリゼさんが二人から目をそらしていた。背中越しで見えないが冷たい目線が刺さっているようだ。

「あ……あの時は怪我してたし……その」

何かいたたまれなくなつて、私は二人の間に入った。

「もともと着替えぐらいしか入つてなかつ……」

……そう言えば、それが無くて困ってるのが今だった。

「エリゼが拾つてれば……まったく……」

グリフさんの冷たい目線がさらに深くなる。エリゼさんへの擁護はたいして出来なかったようだ。

「夜は今の寝間着でとりあえずいいとして……ウィツの服じゃ大きすぎてみつともないですからね……昼間からは」

ウィツさんがそう言つと、残りの二人は深刻そうに俯いた。

夜はだばだばの寝間着を着ていてもいいのかという私の心の声は無視されている形だ。

ついでに言うと私はウィツさんほど豊かな体じゃないとも言える

……

「まあ…荷物の件は後で考えるとして……問題は当面の着替えか」

「服は……当てがあるので何とかしましょう。それを脱がせておいて下さい」

エリゼさんはそう言うところかへ行ってしまった。

「では服はこちらに頂きましょう」

ウィツさんが躊躇無く私の服のリボンを外す。

「はい……」

グリフさんの方をチラチラ何度か見ると、彼は察してくれたのか…

「ああ…ごめん」

と、背中を向ける。

下着を着けているとはいえ、わざわざ男の人の前で肌を晒すこともない。こちらが見えないことを確認すると私は上着を脱ぎ捨てた。

「予備はないって言いましたよね」

私がウィツさんに問いかける。

「昨日注文を出したので、あれと同じ型の服は明後日までありません」

丁寧に私の服をたたむと、ウィツさんは胸ポケットからメモを取り出して読み上げた。

「後は晚餐用のドレスで、あなたの体に合う物が何着かあるぐらいですかね」

「ドッ…ドレスですか!」

私の声が裏返る。

「……でもあれは…」

あれ…?

何かまずかったのだろうか――

何か困ったような顔を浮かべると、ウィツさんは口ごもった。

「昔、ここによく来ていたピアノ奏者が置いていった服ですよ」

私の疑問を遮るように、背後からエリゼさんが黒い布の固まりを抱えて入ってきた。

「グリフさん、いいですよね？」

「うん……彼女に似合うと思うよ」

グリフさんはまんざらでもなさそうである。

「ただ、それで庭いじらないでね」

心配そうなグリフさんの声に私の口元が歪む。

「そこまでやんちゃじゃないですよ」

苦笑いしながらドレスに袖を通すと、香水のいい匂いが自分にまとわりついてきた。

「うあああ……なんか自分じゃないみたい」

鏡の前で一回転すると、ふわりとドレスの裾が跳ね上がる。

少し胸元が開きすぎているのは自分にとって刺激的だが——それも許される気分になってきた。

「どうですか？」

私はスカートの裾をちゃんと摘みながら三人に問いかける。

「可愛いわ」

「似合ってるよ」

エリゼさんとグリフさんが感心したように間髪入れずポンと手を叩く。

「えへへ……」と思わず口元がにやけてしまった。

エプロンドレスの着心地もなかなかよかったが、これは段違いだ。

「よくこんなぴったりの服がありましたね」

「……」

振り向くとウィツさんは口をぽかんと開けたまま私を凝視していた。

「……？」

私が不思議そうにウィツさんの方を見ると、ぷいっと顔を背けて、彼女はその場を立ち去ってしまった。

残された二人の間にも何やら微妙な空気が漂っていた。

「私…もしかして悪いことしました」

恐る恐るエリゼさんに尋ねる私。

そう言いながら……悪いことしかしてないかもと心の中から突っ込みが帰ってきた。

何故か分からない気まずい空気に私は小さくなってしまった。

「いいえ、その…あの娘も忙しいんでしょう…誰かさんのせいだね」ニヤリと私をエリゼさんの目が射貫く。

突然飛び出した毒のある言葉に、背中から冷や汗が拭きだしてくるようだった。

「あは…はは…」

私の中に実はこの人…天然の振りをしてるかも——
そんな疑念が少し湧く。

「それに、まだ残り香があります……」

と、不意に私の肩に手を置かれる。

「はい？」

エリゼさんの言葉がよく聞こえなくて私は振り返った。

「よく似合いますわ」

手櫛で整えるようにエリゼさんが私の髪に触れる。

いつの間にかその手はするりと頭の上に置かれ、私を撫でるエリゼさん。まったく悪い気はしなかった。

「へへ…」

「子供ね」

あれ…どこか遠い目をして私を二人が見ていた。

どうしたんだろう——

「あの」

「そのにこにこした笑顔が…いかにもドレスを着慣れてないって感じがするね」

「うっ……」

どうも浮かれすぎたようだ。

「さてと、グリフさんはお部屋に戻りましょうか」

エリゼさんはグリフさんの方に向かうと、膝下に手を回して彼の体を抱き上げた。

「こ……こら、恥ずかしいだろ」

「女の子の前で倒れる方がよっぽど恥ずかしいです」

子供みたいにグリフさんはバタバタ暴れるも、軽々と外へ連れて行かれてしまった。

主人と使用人ではなく親子みたいに立場が逆転している二人を見て、私は思わず笑ってしまう。エリゼさんに見ればグリフさんも大して扱いは変わらないようだ。

「……さてと」

その後は特にやることも見つからないのでピアノを調律することにした。練習にもなるし、昨日弾いた時に感じたとおり、しばらく手入れをしていない音を引き締めたいという考えもある。もっとも大がかりに鍵盤をばらしたりは出来ないが……

「うん」

意外にも見よう見まねだが、人がいじっている姿を真似してみると、簡単に音を変えることができた。庭いじりが出来ない間はこうして時間を過ごして、しばらくピアノに慣れるのもいいかもしれない。

(3)――

朝起きてから一日中ドレスを着ているというのも疲れるものだ。

最初のワクワク感も翌日には煩わしさに変わっていた。気を抜くと胸がはだけそうになるし、寒いし、動きにくいし……

まあ昼までには服が乾いて、庭の仕事に戻る。それまでは客室でピアノをいじるぐらいしか無いだろう。

私は楽譜をペラペラめくりながら練習する曲を探していた。

「ジゼル」

エリゼさんの声とともに、ぼんと肩を叩かれた。

振り向くとグリフさんも一緒だった。

「何かいい曲はあったかい？」

「あ……」

「よかつたら聞かせてもらっていいかな」

グリフさんはそう言うのと椅子に腰掛け、にっこり笑う。エリゼさんはいつものように手慣れた動作でカップに紅茶を注いでいた。

「えっ……あ……はい」

私はグリフさんを選んだ楽譜の束を差し出した。

ここにある曲なら何とか弾けるだろう……

「何か聞きたい曲はありますか？」

「君の好きなのでいいよ」

ん……と……困ったなあ……

さっきいじったとき高音の方はあまり調整してないし……まだ試し弾きしてないから……

「教会の曲でいいですか？」

賛美歌とかなら重厚な曲調であまり高い音を使わないから大丈夫だろう。

二人はそれでいいと頷いた。

「じゃあ前に弾いた曲の続きでも……ではいきます」

すうつと一息ついてから、わたしは鍵盤を優しくなでるように演奏を始めた。

曲は暗譜してるので指先の動き自体は考えなくても進めることが出来る。適度に脇目を振りながら二人の反応を見つめると、じっと目を閉じ音に聴き入っているようだ。

うん……聴衆の反応は悪くない。

今日はあまり弾けず……つまり自分なりの転調とか加えず曲を聴いてもらおうと思った。

安息日の祈りの前に捧げる曲――

あまりに弾き慣れていて、私の感覚としてはあっという間に終わってしまった。

「うん、よかったよ」

「ありがとうございます」

演奏を終え、一礼する。こういう曲の後なので今日はさすがに拍手はないが、二人の表情を見れば十分満足だった。

「これからもよろしくね」

「はい」

グリフさんは私の腕を軽く叩くと、

「じゃあ僕は戻るね」

部屋の外へ出て行った。

ずいぶんあつさりしてるなあ……

「もう一ついいですか」

一方エリゼさんはその場を動かず私を見つめている。

そして本棚の聖典を指差した。

「祈りに……立ち会ってもらえますか」

「えっ、私でいいんですか？」

エリゼさんは小さく首を縦に振った。

安息日の祈りは神を称える賛美歌を教会に集まったみんなで歌い、司祭の立ち会いの下で一人一人祈りの言葉を捧げていく。私のようなシスターはその祈りの場では無言を貫かなくてはならない。

今日はその日ではないし、ここは教会でもないし……そもそも私は

「こういうのは、気持ちですから」

そういうもんかなあ……

まあ、ずいぶん形式は違うが……私自身が破門された人間だからかまわないか……

「グリフさん達とかは……」

「あの人は、こういうこと嫌いですから」

うーん……最近はそのような人が増えて教会も商売あがったりなんだよな……

もはや私には関係ないことだけど……

「……」

私は形式に則ってテーブルの上に聖典を置き、エリゼさんの手を取り本の上に置く。私の手はその上に添えられた。

「主よ、罪深き私たちを汚れた私たちのお許し下さい。現世の飽くなき欲望と執着にまみれぬように、私たち家族を見守り下さい」

エリゼさん一言ずつはつきりと発音し、真剣に祈りを捧げていた。

(4)――

「ふう……」

ここでの生活も一週間が過ぎた。

「これでよし……っと」

草むしりを進めていくうちに、庭の全体像が見えてきた。

テラスを中心に芝生が広がり、季節の花が点在していた昔の光景がようやく想像できるようになる。

この館の設計者の趣味を表しているのか噴水とか銅像とか、そういう大きな物が視界を邪魔しないように出来ているのは興味深い。

塀を地平線に見立て、その先は空が広がっているだけ――

テラスの椅子に座ると開放感があふれる造りになっていた。高台にあることを全面的に生かしたのだろう。

「……すごい……」

私は庭の奥まで歩いて胸元まである高さの塀に身を預ける。眼下には広大なブドウ畑が広がっていた。

さらに目線を下に向けると……あまり心地よくない崖の全景も見える。落ちれば……怪我では済みそうにない。

「……」

視線を上に戻すと霞みの向こうに、私が拾われた土手も微かに彼方に望むことも出来た。

思えばあつという間だった。修道院を追い出されてから半年……僅かな蓄えで食いつなぎ、農場の仕事でもありつけないかと関所のない険しい道をひたすら歩いてきた末に――

「本当はあそこで働くつもりだったのになあ……」

自分の身に何が起こるかなんて、分からないものである。

「なら今から戻りますか？」

「うえっ！」

気がつくと背後にエリゼさんが立っていた。

「いや……これは、その……」

エリゼさんは慌てる私を見てくすくすと笑っていた。

「ちょっと休んだぐらいで怒らないわよ……」

それに、こんなに早くここまで来れるとは思わなかったわ」

エリゼさんは私の立つ地面を指差す。確かに一週間前はここに堀があることも分からなかったのだ。

「この向こうは危ないから、この堀の高さまで刈ればいいわ」

「はい」

それぐらいならすぐに終わってしまう。

そうになると、単調な草むしりを終えて次の段階に移れるわけだ。

「次はどうしましょうか」

私の問いにエリゼさんは麻袋をぽんと投げ渡してきた。

「街に昔からお付き合ひのある花屋さんがあります。この庭全体の植え替えとなると……たぶん大きい街から注文することになるでしょうが……」

私が麻袋を空けると中に銀貨が三枚入っていた。

「この袋に入る分ぐらいは何か種でも買ってきて下さい」

「……こんなに？」

この国の発行する銀貨を物珍しげに見る私。種を買うだけでは額は多すぎる気がする。

「残った額はお小遣いにしていいですよ」

「……本当に？」

いや……私、これだけあれば子供の頃の私と司祭の二人で一ヶ月は食いつなげる自信があるんですけど……

「どうしたの、目をまん丸にして」

「いえ…何でもないです」

まあ、そういう世界もあるということにしておこう。でないとな世の中の不平等とか色々頭を悩ませなくてはならない。

「日が落ちるまでは帰ってきて下さい」

「私だけで大丈夫ですかね」

いきなり知らない街にお使いに行けと言われ、私は少し戸惑った。「大丈夫よ、その服を着ている限り迷子になっても誰かが助けてくれるわ」

…心配しているのは、そこではないのだが…まあ、いいや…
思いがけず訪れた気分転換の機会を、私は楽しむことに決めた。

(5)――

公爵邸に続く高台のふもとは、館の警備に当たる兵が常駐している小屋がある。普段から狼藉者を排除するよう閉ざされた門は、私が近付くにつれ大きく開かれた。

そういえば馬車に揺られてこの道を通ったはずなのだが…そこら辺の記憶は曖昧だ。

「お気を付けて」

鎧に身を重ねた男性が私に一礼する。

私もぎこちなく挨拶をすると、街に向けて早足に歩き出した。

「……」

街の広場に付くと、まばらだった人通りもにわかに活気立つ。

エリゼさんからもらったメモによると、目指すお店はこの広場から東に抜けた商店街にあるという。

「はて…東とは…」

私は辺りを見渡した。そう、広場を中心に教会がある方が北…だから――

体の向きを正しい方に向ける。街の造りなんて、どこに行っても変わらないものである。

ちなみにお昼前にお使いに出されたということは、たまには違う

ものを食べなさいということでもある。

このまま街を探索して、食堂を探さなくてはならない。

私がきよろきよろと辺りを見渡すと、その方を向いた人が慌てて目を逸らしていた。

「……？」

おかしい……これじゃあ昔と変わらない。

自分の身分を表さなくてはならなかった頃に向けられていた視線と、今自分に向けられているそれは……同じでは無いが――

何とも言えない気持ち悪さが込められていた。

「あの……」

「はい？」

突然背後から呼び止められた。見ると中年の女性が怖々と私の方向を向いている。

「あなたは……」

「公爵邸に新しく雇われた使用人ですけど」

何をおどおどされているか分からず、つい私は突き放したように答えてしまった。

彼女は一瞬安心したような表情を見せると、何も答えずどこかへ行ってしまふ。

「……」

ああ、新参者だからみんな見てるのか……

少し不可解な気分を私はそう解釈して誤魔化すことにした。

定食屋でも花屋でも、私の姿を見た人は一瞬驚いたような顔を見せる。

「……うん」

私はその度に何か変な格好しているだろうかと訝しがりながらも気にしないように努めていた。

確かに私が孤児院にいた頃は、街を治める領主の館から使用人が買い物に来ることなどは珍しい出来事だった、うん……だからみんな珍しがって私を見ている……

それにしても腑に落ちないことも多い。

何だかもやもやした気分を抱えて館に帰るのが嫌になった私は、街の教会へと赴くことにした。

お小遣いとしてもらった額を少し教会に寄付し、祈りの言葉を呟くと、少し気分が晴れてくる。

「…あなたは」

奥の部屋から司祭が顔を出してきた。

「あつ………今度公爵邸に」

「知っていますよ。それにあなたの破門が解かれたとき立ち会いしましたから」

反射的に出てきた答えを遮り、カツカツとブーツの音を響かせて、司祭はベンチに腰掛ける。そういえばその通りだ…

促されるまま私もその隣りに座った。

「新しい生活はいかがですか？」

「…なんか…変な感じがします」

「ほう？」

司祭は意外ですねと、驚いた顔を見せた。

確かに………何が変なんだろう。こんなに恵まれた環境にいて――

「私が登場いな場所にいるような…感じがあるんです」

私はそう呟くと教会の床に目を遣る。ことと同じように寂れた教会で過ごしていた日々はもうかなり前である。

それでも祭壇の前で司祭と話していると、抱えていた悩みが自然と言葉として紡ぎ出されてくる感じがした。そう――

「今までの自分は何だったんだろ…そんな気分になることがあります。」

グリフさんやエリゼさんは当たり前のように私を受け入れてくれて……大して役に立つてないのにおいしいご飯と綺麗な服と寝心地のいいベットにありつけて」

頭の中でなにか繋がるように、言葉が体から飛び出した。

司祭は多くを語らず私の頭にぼんと掌を乗せる。

「あなたが成すべきことをなさい……私にはそれしか助言できません」

「……」

「ただ、あなたは選ばれくしてあの館に選ばれたのだけは違いありません。」

あの日あなたとあの館の人達を合わし示したのは、他ならぬ」

「主のご意志……」

子供の頃からたたき込まれている私の答えに、司祭は満足そうに頷いた。

(6)――

教会での祈りは、私をさらに混乱させていた。街の人々が私に見せる仕草、司祭の言葉、その一つ一つに違和感を覚える……そんな感じがしてならない。

「……」

まあ……時が来れば分かることもある――今は……

「うん、仕事しよう」

私はひと言自分に言い聞かせ、あてどもない思考を止めることにした。

結論のでないことを考えすぎるのは悪い癖だ。それで時間を潰すぐらいなら仕事に集中しよう……日没までは少し時間があるし……

折角だから買ってきた芝の種を禿げた部分を埋めるのに使うことにした。

種をまく前にもう一度丁寧に雑草を摘み取り、館に備えてあった肥料をまく。

そして均等に種をばらまいていく。この繰り返しがしばらくの仕事になるだろう。

「ふう」

気がつくと、太陽は地平線に隠れつつあった。そろそろ晩ご飯の時間になりそうだ。

私は扉に片腕を預け館の方にくるりと体を向ける。

「——！」

テラスの上に人影が二つ。

私はビクリと体を震わせた。二階の窓から私の姿を見つめるグリフさんと目があつたのだ。そのすぐ後に――

「えっ……？」

すぐ後にはウィツさんが立っているが、その二人の距離は重なっていると言っているほど近かった。しかもウィツさん……あの位置じゃ……その……グリフさんに背中越しに抱きついてるように見えるし……それは……いいとして……

「なんで……」

> i 1 7 0 6 8 — 2 3 2 4 <

あんな無表情で二人は私を見てるんだろう――
何か獣に射貫かれたように、私はその場から動くことも出来なかった。

突然、ウィツさんの口元が小さく緩む。そしてグリフさんの肩に手を回すと、二人は私の視界から消えてしまった。

「なんなの？」

私は強い嫉妬を覚えた。……って……嫉妬？

高鳴る鼓動に戸惑いながら、私は頭の中を整理する。

「うん……間違いない……」

一瞬わき上がった感情はそう表現するしかないものだった。

(7)――

ウィツさんはグリフさんと食事することが多い。給仕をしているとはいうが、考えてみればその仕事を終わっても彼女と夜に合うことはないのだ。

そこに何か意味があるのか――

正直年頃の女の子としては考えたくない想像もすることが出来る。でも……そんな表面上は雰囲気でもないんだよね……

とにかくあの無表情とも……私に見せる敵意とも感じる表情が脳裏をこびり付いて離れないのだ。

私が二人にそこまで嫌われるとも、いや……ここに入った経緯からしてもどうなんだろう……ウィヅさんは歓迎してないようだし……でもグリフさんだったら何で――

「ジゼル？」

「……」

「ジゼルったら！」

私はハッと顔を上げた。

「最後の年度は見つかりましたよ、どうしたんです？」

意識が梯子の中段に立ったままどこかに飛んでいたらしい。

「ごめんなさい……」

ばつが悪そうに私はゆっくりと梯子を下りていく。エリゼさんは目的の本を見つけたらしく、パラパラとめくりながら走り書きをしている。

私が持っている本は誰かの日記だった。二、三頁めくってしまったが探していたものとまるで関係ないようだった。

「……はあ……また役に立ってないなあ……」

食事を終わると私はエリゼさんに呼ばれ公爵の書斎へ連れて行かれた。何でも今日中に探さなくてはならない本があるということなのだが、ウィヅさんの手が借りられないということで、私がかき出されたわけである。

本自体はここ十年の農作物の収穫記録らしいのだが、部屋の本は乱雑に置かれ整理されていない。手が回らないというのはエリゼさんの弁だが、どこかで聞いたような話だ。

この仕事を終えたときには普段ならそろそろ寝ようかという時間になっていた。

「少し疲れてる？」

エリゼさんは私の背後に回り肩をぎゅっと掴む。

「い…いえ…そんなこと無いと思います」

その感触に体を強ばらせるも、エリゼさんはただ私の肩を揉もうとしてくれるだけのようだ。

自分で否定しつつ確かに疲れているのは間違いない。
体の緊張が解けてくると、どっと眠気が襲ってくる。

「――！」

同時に無防備な私の頭が…嫌な…あの二人の姿の…映像を送り込んでくる。

「ふふ、何か考え事でもしていたのかしら」

見透かされているようにエリゼさんの指先が私の頬を撫でた。
私は躊躇うように口をすぼめた。

もやもやした気持ち私が私の中を渦巻いていた。

「…ウイヅさん…って」

答えを聞きたくないという気持ちが強いが心の大半を占めている。
それなのに言葉が口から漏れてしまったのだ。

仕方がない…聞かないことで事実が変わるわけではないただ
自分が惨めになるだけである。

「あの二人って…付き合ってる…んです…か…」

消え入るような小声の私。

「ウイヅがグリフさんといたから？」

途端にエリゼさんの表情が曇った。

「…」

「それとも…私の手伝いもせずあの娘が男の子の部屋いたことの方、
問題かしら」

低く抑えられた声にエリゼさんの声に、私は思わず手で顔を隠してしまった。

「隠し事が下手ね、あなたは」

エリゼさんの眉のつり上がりがさらに険しくなる。

そして私の正面にわざわざ移動してきて、

「主人の情事に使用人が立ち入るべきではありません」
そうきっぱりと断言した。

「じよ…情事って……」

……頭が真っ白になった。

やっぱり――

いやだから、私がどうして落ち込む――

……こんな経緯でこの館に雇われたんだから…期待しない方がおかしい……よね…

肯定的にも否定的にも、色々な考えが私を駆けめぐる。これじゃあ…まるで恋する少女みたいじゃないか。

いや…一六歳だから少女なのは間違いないけど…ああ、もう！
「ふふ、冗談よ。泣き出しそうな顔しないで」

エリゼさんがくすつと笑い、いつの間にかにじみ出していた私の涙をぬぐう。

私は狐につままれたような顔できょとんとしてしまった。

「ウィツがたまにあそこで食事するのは、ちゃんと理由があるんですよ」

「はい？」

「その……嫌らしいことじゃないけど…ウィツにとっては恥ずかしいことかもね」

意味深……？

いや、なにかはぐらかされてる気もする。

「種明かしすれば呆れるような理由よ」

何か心に浮かべ一人で楽しそうに笑うエリゼさん。

ますます意味が分からない。

逆に私が考えたことが途方もないと聞いたげに、わざとらしくエリゼさんは頬に両手を当てて赤く染めていた。

「ねえ、本当にあの二人が付き合ってたとしたら、あなたはどうするつもりだったの？」

エリゼさんは口元を大きく緩めると、すつと指先で私の頬をなでる。まるで子供をあやすようである。

「年も近くて、優しいご主人様……せつかくの好機を逃すのは惜しいわよね」

「な…何のことですか……」

慌てて私はそのいたずらから逃れようと、椅子から立ち上がる。

確かにそんな妄想が……金持ちに見初められて玉の輿……なんて考えが、生死の危機に際して浮かんできたのは事実だが……

「まあ、館内での色恋沙汰は、仕事に支障がない限りは私は干渉しません」

「いや、その私はそんなつもりじゃ……」

いざ現実が妄想を追い越しているような今、それがどれだけ子供じみているかと恥ずかしくなるぐらい忘れたいことなのに、この人はそこを巧みに突いてくる。

「あらあら、ジゼルはグリフさんはお嫌いかしら」

笑み……本当に悪意の無い……いや無いようにしか見えない笑み

……

「うっ……」

エリゼさんに押されるように後ずさる。

「うあっ」

途中机の上の本の山を倒した気もするが、私は今それどころではなかった。

「あの……他にやることなければ……私そろそろ寝たいんですけど……」

これ以上ここにいても、おもちゃにされるだけである。

この苦手……というか、どうしても好きになれない空気から解放されようかと私はもがいていた。

昔から女の子が二人以上でしゃべっていると……それが修道院という特異な環境であっても、色恋沙汰の話になり舞い上がるものだ。それが、エリゼさんまで該当すると思うと正直恐くなってくる。

「そうね……」

唇に手を当ててエリゼさんは少し考えるように顔を上げた。

「もう一個お仕事頼んでいいかしら？」

私が断らないことを知っていて……無情な問いかけが返ってくる。

(8) ———

「あの……」

化粧台の前に座らされた私は、体を使い古したシートにすっぽりと覆われていた。しかも暴れるといけないうと、腰紐が椅子にくくり付けられているという有様である。

「どういうことでしょうか、これは……」

エリゼさんは動くことの出来ない私を尻目に、ぐるぐると椅子の周りを回りながら私を観察している。

「前から気になっていたのよね……」

何か独り言を言うように呟きながら後の棚から箱を取り出すエリゼさん。がちがちと、金属同士がぶつかる音が聞こえてくる。

「まあジゼルの本音も分かったわけだし」

「だから本音って何ですか！」

どうやら、書斎での話は続いているようだ。

「私は年齢的にもウィズよりずっとお似合いと思うし……公爵家としては跡継ぎは考えないといけないし……」

「うん、分かりますから……少しは私の話を聞いてください」

「……子供の頃から仕える主人がどこぞの馬の骨に持って行かれるぐらいならね」

それはむしろ私のことを言うんですか……っていうか……

私の言葉に少しは反応してください——

もうあきらめにも似た気分で、私は成り行きに任せることにした。エリゼさんはすつとはさみを私の後頭部に当てると、ぐつと力を入れる。

次の瞬間はらりと、親指ほどの長さの髪が床に落ちた。

「ひっ」

こういう格好にされてから覚悟は出来ていたが、彼女の行動にはまるで躊躇いがない。

「何も言わず切るのは止めてくださいよ…」

「あら、ごめんなさい」

一度はさみを入れたのが合図なのか、エリゼさんが押し黙ると、じよきじよきと音だけが部屋に響くだけとなってしまった。

私としても失敗されたら困るので、目をつぶり、身体も口も微動一つしないことにする。

「……」

「……ふふっ……」

奇妙な声に薄目を空けると、鏡には鼻歌混じりに刃先を見つめながらうつとりしているエリゼさんの姿が写っていた。

笑ったり黙ったり忙しいなあ…と思いつつ、

「どうしました？」

と、私は尋ねてみる。

「最近腕を振るう機会も無くて、うずうずしてたのよ」

はさみと櫛を器用に動かしながらエリゼさんは声を弾ませた。

「グリフさんは決まり通りに切ればいいし、ウィズは真っ直ぐ整えるだけ……」

私は結んじやえばいい……それじゃあ、はさみが錆びちゃうでしよ？」

そう言うつとエリゼさんが笑顔のままぺろりと刃先を舐める。

「この子もかわいそうでしょ」

ぞくつ、と背筋に冷たい悪寒が走り抜けた。

たぶんこの人は…こういう趣味の悪い冗談が好きなことを隠していたんだと思いたい

「はい、出来上がり」

「……」

閉じていた目を開けると、その光景に私は驚いた。

「気に入らない？」

「いえ……いつの間に鏡に布をかぶせたのが疑問で……」

前髪を切るため私が目を閉じている隙を突かれたのだろうか？

「それはほら、おめかししてからのお楽しみ」

エリゼさんはそう言うところから一着の服を取り出した。

「お休みの日までエプロンドレスだと窮屈よね」

渡されたのは平服だった。シャツもスカートも灰色を基調として
いるところは今のと変わらないが、これなら街に行っても好奇の目
に晒されることはないだろう。

「…これ…いいんですか？」

「もちろんよ。きつとグリフさんも惚れ直すと思うわ」

まだその話し続けるんですか……

「からかわないでください」

私もいい加減飽きてきた。声に少し怒気を入れる。

「ふふ、ごめんね…ウィツと違って反応が面白くて」

「……夜も遅いのに……仕事はいいんですか」

少し嫌みに聞こえるように冷たく言ってみる。

「あら、使用人の整容も仕事のうちよ」

「はあ……」

その裏にどんな不純な動機が見えてきそうでも……まあ言われてみ
ればその通りである。

「でも、確かに寝なきやいけない時間ね」

「はい。今日はありがとうございました」

ようやく解放される機会を逃すまいと、私はぺこりと頭を下げた。
エリゼさんの部屋を後にした。

(9)――

「ふ…ふふっ」

実のところ切られた髪を早く見たくてうずうずしていたのだが、
エリゼさんをこれ以上喜ばせることもないと我慢していたのだ。あ

の調子だと、無理矢理私の服を剥いで、着替えさせることぐらい、何とも思わなかっただろう。

私は廊下を小走りして自分の部屋に戻っていた。

「……」

自分の手で髪を触ると、ウィツさんみたく真つ直ぐとそろえていることが分かる。今まで長くなったら適当に切るくらいしか考えてなかった私には、新鮮な感触だった。

たぶんここに来なければ、こんな風に外観を意識する機会なんて来なかったと思う。

「さてと…言われたとおりに…」

部屋戻ると、早速もらった服に着替える。

「へへっ」

エプロンドレスをたたむのがもどかしいぐらい、期待する私がいる。そう…平民だったら滅多に訪れることはない経験だが、捨て子の私には決して訪れるはずのない経験なのだ。

珍しく心臓が早鐘を打っている。平民の女の子みたく髪を切っておめかしするなんて…

何を――

私は期待してるんだろう。それこそエリゼさんの言う通りじゃない…

髪型が変わったから、服をめかし込んだから、私の魅力が上がるなんて…そんなのおかしいはずなのに…何で…

「…あ…」

鏡の前に立った瞬間、私の口から息が漏れた。

くらっと、立ちくらみのような、目の前の鏡に吸い込まれるような感覚が私を襲う。

そこに立つ女の子は、本当に…自分じゃないようだ。

「……」

自然な表情で私は私を見ている。初めからこの形であったとでもいうように、私が鏡の前で立っていた。

なにか……舞い上がった分だけ、冷めた感情が襲ってきた。

それは悲しいというわけでは決してない。前の方が良かったとい
ってるわけでもない。

言葉でどう言ってもいいか分からない無感情が…鏡を通して伝わっ
てきたのだ。

そうそれは――

「ウィツさん？」

そうだ……夕暮れ前に見たあの二人の表情である。

「くっ……」

突然お腹が締め付けられるように痛み出す。気持ちが悪くなっ
てきた。

私は慌てて服を脱ぐ。せつかくの服を台無しにするわけも行かず、
きちんとたたんでクローゼットにしまう。

「……」

これ以上することもない。寝間着を羽織ってベッドに横になると、
何も考えちゃだめと心の中で呟きながら、私はゆっくりと眠りに落
ちていった。

【3章】残された想いを

(1)――

どんな場所でも熟睡することだけが特技と思っていた私が、珍しく夜中に目を覚ました。

月の高さから見て……いや、よく分からないや。

ただ外の暗さから考えても、夜が明けるにはまだ時間がかかりそうである。

……まいったな……目が冴えちゃった。

ランプを付けて起きていようにも、恐いくらい静かな暗闇が広がっている。

このまま起き続けるのも、微妙な感じがする。

「……ん……？」

突然、廊下からガチャンと物音が聞こえてきた。

「ひっ！」

私は恐怖におののく。まるで時期を読んで私の心を見透かされたみたいで、気持ち悪い。

「なに……」

誰かいるのだから？

私は布団から起き上がり様子を窺う。

しばらく耳を澄ませていたが、何か起きる様子は――

「――！」

今度は壁をドンドンと叩く音が響いてきた。

泥棒？

……すこし寒気を感じつつ、私は音を立てぬよう扉を開いた。隙間から辺りを窺うも、灯り一つ無い廊下の様子はよく分からない。い。

ようやく目が慣れてきたか……月明かりに照らされた廊下に、微かに小さな影がうずくまっているのを確認できる。

やはり、誰かそこにいる。

「あ…の…」

勇気を振り絞って私はそれに近付いた。と、

「ひいいい！」

影は突然私の足を掴む。私は反射的に飛び上がった。

「……って…」

むくりと起き上がった影は、よく見るとウィツさんに…よく似ている。

「どうしたんですか、脅かさないでください！」

私は息を整えながらウィツさん声を掛けてみる。

反応がないので、部屋からランプを持ってきて照らし出すと、そこにはあられもない姿が映し出された。

「ウィツさん…あの…」

彼女自慢の長い髪は乱れていて、寝間着のボタンが外れていて、もう少しで胸が直接見えそうくらいである。

「うっ…気持ち悪い」

床に倒れたウィツさんは私が見えていないのか、花瓶に向かってなにやら呟いていた。

肩を叩こうと、さらに近付くと今度はお酒の臭いが漂ってくる。

「ウィツさん…酔ってますか？」

…まあこの様子だと聞くまでもなさそうだが、私はとりあえず尋ねてみた。

「そうです…酔っぱらいが酔っぱらって何が悪いんですか」

「……」

こりやまた…理解出来そうでもない返答が返ってくる。

なるほど…さっきの音はこの人が花瓶をひっくり返した音だったのか…私はようやく納得がいった。

「…とりあえず部屋に帰りましょうよ」

「嫌です。ここが私の部屋です」

あの…意味が分からないんですけど…どうしよう、この人…

困った。昔、正餐のワインで同じように泥酔した修道女は…仲間三人で担ぎ上げたことを覚えている。

そして目の前の光景は、私では、とても手に負えそうになかった。「とりあえず立つてください」

「ひどい、私が冷たい態度をとるから恨んでるのね！」

今度は太ももに抱きつかれた。ウィツさんがわざとらしく泣き真似をしている。

身動きが取れずに私は閉口してしまった。

「…どうしたの？」

とうとう騒動を聞きつけてグリフさんが二階から降りてきてしまった。

「あつ……これは」

ウィツの姿を見るとグリフさんは慌てて目をそらしていた。

「…いや、目に毒です」

私は慌ててウィツさんの寝間着のボタンを締めた。いつもの彼女からは想像できない低いうなり声を上げ、子供のように服を着せられるとウィツさんはうなだれる。

「だから……飲み過ぎだつて忠告したんだよ…僕は…」

「えっ……」

眠そうに目をこすりながらグリフさんは大きくため息をつく。意外な答えが返ってきた。

「うるさいです、一人で飲むのが寂しいって私を部屋に呼んだのはどこの誰ですか」

ウィツさんはがばつと立ち上がると、今度はよろめきながらグリフさんに詰め寄った。

「どこの公爵様ですかって聞いてるんです！」

彼女は人差し指でグリフさんの胸板を突く。

ついにこの酔っぱらいは自分の雇い主にまで絡み始めるようだ。

「ああそうだね、確かに僕が悪い」

グリフさんはウィツさんの両肩を掴み、くるりとその身体を回し

た。

「ということでジゼル、後始末よろしく」

「ふえ？」

まぬけな声を上げる私。

軽く突き飛ばされたウィツさんは千鳥足で私に飛び込んできた。

「ちょ…逃げる気ですか！」

「はは、そうさせてもらうよ」

グリフさんは笑いながら階段を上がって自分の部屋に向かってしまった。

おいおい…私にどうしろと？

「…はあ」

私は大きなため息をついて、ウィツさんの耳元に口を近づけた。

「ウィツさんも寝ましようね」

「……はい」

今度は彼女はぐったりと疲れたように私の腕にしがみつく。

私は自分で歩く気のない彼女を引きずるように抱えて部屋へと連れて行った。

「入ります…」

「たらいまー」

部屋の扉を開けると、そこもやはりお酒の香りがした。

シーツや掛け布団がずり落ちていて、床にウィスキーの瓶が落ちている。お酒くさいのはこれが原因らしい。

片手で布団を直すと、ウィツさんをベッドに寝かしつける。

眼鏡は机に置いて、瓶を拾おうと――

「…っ…」

突然ウィツさんが私の腕を掴んだ。

「もう…今度は何ですか？」

「…お…ム？」

ウィツさんがぼんやりと私を見ている。と、私の頬が手の平で押さえつけられた。

「…ちがう…あなた…だれ」

鼻と鼻が当たりそうな距離で酒臭い息をかけられながら、ウィズさんが目を細める。

酔っぱらいは私の服をくんくんと嗅ぎながら、また「ちがう」と呟いた。

「……ジゼル…ですけど…」

「うそよ………」

いや…嘘って言われても…

戸惑う私にかまわず彼女はかぶりを振る。

「ああー！」

今度はわけもわからず抱きつかれると、私はベッドに引きずりこまれた。

「あれ…」

ウィツさん…泣いてる……？

「何で……何で…いないの」

「…？」

「どうしてここにいないの…」

私はどうしていいか分からず固まってしまった。ウィツさんはすすり泣きながら私を離さない。

いつの間にか足までがっちりと絡められて身動きが取れなくなってしまった。

「……うつ…」

こうなったら仕方がない。解放されるのを待つしかないようだ。

「何でこんな目に…」

服越しに暑苦しさを感じる。私は彼女の酔いをすこし覚まそうと、手を伸ばしてベッド越しにカーテンを開いた。

部屋に新鮮な空気と月明かりが流れ込んできた。

「…？」

すこし明るくなった部屋の全景が望めるようになった。

服は椅子にかけられているが、ゴミも下着もタオルも関係なく床

に散乱している。

机にはさっきのウイスキーだけでなく酒瓶が無造作に転がっていた。

すべての光景を総括して一つの言葉が浮かんでくる。

「酒乱……」

……彼女の……見てはいけない一面を見た気がした。

(2)――

まばゆい光に目を覚ますと、私はすこし混乱した。いつもと違う天井が視界に飛び込んできたからだ。

「……ああ」

どうやらベッドから抜け出せず、結局そのまま寝ていたらしい。首をぐるりと回すととうのウィズさんはエプロンドレスに着替えていた。

「おはようございます」

昨夜の騒動が嘘かのように、きりつとした表情で彼女が答える。

寝ぼけ眼で辺りを窺うと、ちらかっていたゴミは片付けられていた。

「……あの……昨日は見苦しい姿を見せてすいません」

ウィズさんは表情一つ変えず一礼すると、たぶん部屋から持ってきてくれたと思う私の服を差し出してくれた。

こつという気の使い方は普段彼女らしい。

「すこし飲み過ぎたようです」

「すこし……ですか……」

さも当然のようにのたまうその言葉に、私は呆れてものが言えなかった。

自分が何したのか覚えてるのかな……

私はお酒飲んだことが無いからよく分からない……

ただ、たぶん何事もなかったように振る舞っているのだと信じた
い。

私もとりあえずそれに合わせることに決めた。

「髪、どうしたんですか」

「これは…エリゼさんが」

私は髪を押さえながら答えた。

「そう…」

すこし顔をしかめると彼女は部屋を出て行った。

(3) —

「…」

自分の部屋に戻り着替えると、庭いじりの道具を戸棚から出す。鏡に映る自分に戸惑いながらも今日も仕事が始める。

ただし…庭の手入れといっても限界がある。

それに注文した物が届くまでは、買ってきた種にも限りがある。

今日は珍しくこの館にお客さんが来て……なんか恐そうなお爺さんが私の姿を見て怪訝そうにしてたけど…その人の案内をする仕事があったが、時間はそんなにつぶれなかった。

あつという間に買ってきた種は無くなってしまった。

私は作業をほどほどに切り上げると、手持ちぶさに仕事を探しに館内をうろついた。

そう、やろうと思ったことはある。ただ、ちょっと不安である。

台所にいるエリゼさんに私の思い付きを話すと、

「それは助かります」

と、あっさり許可をくれた。

書斎に入り私は床に積まれた本を拾い始める。

皿洗いに掃除洗濯と、二人がやらせてくれない仕事に比べれば、本を並べるだけの簡単な作業である。

まあ公爵が仕事をするために欠かせない部屋だから……すっかり本棚でも倒した日にはまた怒られるだろうが……

「ふう……」

こつという地味な仕事は好きだ。気分がすっきりする気がする。

本は棚ごとに種類が分かれているようで、所々抜けている場所がある。

書斎で仕事をしてそのまま寝る人……たぶんグリフさんのために、小さなベッドも用意されていた。

「年度ごとに……っと」

昨日の手伝いで、どこに何の本があるかは大まかに把握していたので、整理自体はテキパキと進んだ。

さすがに農業とワイン生産で栄えている地域なだけあって、公国の財務記録の他は、ブドウやワインの生産量の記録に関する物が多い。

他にも……街の人の氏名や家族構成などが分かる本もある。

それらの本の重厚な装丁を見て、昨日今日入った私が、ここにいていいのかという気分にも少し襲われた。

仕事とはいえ、整理するために中身をパラパラめくることに、軽い罪悪感もある。

「……あれ」

ふと一冊の本に目が留まった。その棚には「寄付目録：教会」と書かれた本が横積みされている。そして……最近埃を払った跡がある。これはつまり……最近使ったということだ。

「私のために……」

お金で免罪符が買えることは知っている。でもその額は到底自分に払えると思っではいなかったたので、興味はなかった。

だから悪いと思いつつ興味本位で「自分の額」を見てみることにした。

「う……あ……」

額面を見て絶句した。

エリゼさんは骨董品一つといったが、そんなものではない。昨日エリゼさんと一緒に見た本に書かれていた会計目録の数字……たしかそれと比べても……平均税収のざっと二割は占めている。

「……なんで」

それで自分がやってることって……ただの庭の手入れだけだ。どう考えても値するような話ではない。

「いや……でも……」

頭をもたげる疑問が湧いてきた。

今まで考えないようにしていたこと……そう……この家に迎え入れられたのは別の目的があるように思えて仕方がないこと――

何やら恐くなって私は本を元に戻した。

「……何か変」

私はかぶりを振ってもたげた考えを捨てる。

心のどこかに嫌な気持ちを抱えながらも、棚の整理を続けていく。隣の棚には物語が置かれていた。これも……最近埃を払った跡がある。

「借りても……いいよね……」

私はその本をテーブルの上に静かに置いた。

そこには、どこにしまっていていいか分からない誰かの日記と一緒に置かれている。

後でエリゼさんにどうするか聞くことと、頭の中にメモ書きして、私は作業に集中した。

(4)――

切りのいいところまで整理がついて、食堂に行くと、夕飯までにはまだ時間があった。

エリゼさんは好きにしていっていいと言う。

毎日の仕事自体は何かを必ずしなくてはならないということではなく、まして他の二人が優秀なのでこうやって暇を持て余すことも、出来てしまう。

今は休んでいいと言われたので、邪魔にならないように休憩をとる最適な場所に移ることにした。

そこは自分の数少ない居場所である。

裏庭のベンチで本を読む……うん、何か高貴な身分になったみた

い。

そんなちよつとした自己陶醉に浸ってみる私。

「ジゼル？」

ギクッ

私の身体がビクリとはねた。

「あっ……」

声の主はグリフさんだった。

「何、読んでるんだい？」

彼から見れば、今の私はさぼっているようにしか見えない。

「いや、その……これは、エリゼさんが休憩取っていいといわれたんで」

グリフさんは笑いながら私の隣りに座る。

「いいんだよ、君は無理に仕事はしなくても」

屈託のない笑顔を私に向けるグリフさん。でもその言葉にはすこし引かかった。

「……」

「……いや……」

近い……し……

それに私の胸に腕が当たってるし……

これじゃあ昨日のウィツさんと一緒だ……

いや、使用人としてはこちらから距離を空けるのも失礼……だし？

「どうしたの、汗かいてるよ」

グリフさんはハンカチを取り出して私の額を拭いた。見る限り、

何か下心がありそうという感じにも見えない。

私は無理矢理意識を本に向ける。

確か……病気の女の子が寝ているところ……まで読んだ……

いや……頭にそんなものは入らない。

どうしたんだろう……私は異変に気がついた。

「あっ……」

そう、グリフさんと話すことが辛くなってきたのだ。

「グ……グリフさん……」

「なんだい」

「この本はお読みになったことは？」

本の頁を開いて渡すときに私は体勢を強引に変えた。

「ああ……ここに来たときに暇つぶしに読んだよ……どこにあったんだい、こんな本」

グリフさんは私から本をひょいと奪い取り、頁をめくる。

「そんなによくできた話じゃなかったよ」

「そうですか」

グリフさんははっと、表情を変える。

「ごめん……これから読む楽しみ……減らしちゃったね」

大きく肩を落とすグリフさん。

いや……そんなに落ち込まれても……

「相変わらず僕はだめだな」

「い……いえ、そんなこと無いですよ、ほら……むしろ無駄な時間を与えない優しさ？」

突然、何だか知らないが酷く沈み込む彼に、声をうわずらせながら私は取り繕う。

「そう言ってくれると嬉しいよ」

今度はぱっと明るくなって、グリフさんが笑った。

あれ……そういえば、ここに来た時って言った？

また言葉の一つに引っかかりが出来た。

「それはそうと、今夜は暇かい？」

グリフさんは私の本をぱたりと閉じる。

「へっ？」

「用がないなら、今夜、僕の部屋に来ない？」

……ちよっ……

とつさに目を合わせる。グリフさんは真剣に私を見つめている。

私の顔面が紅潮していくのを感じた。

「そ……その……こ、困ります」

「えっ」

グリフ、不思議そうに私の様子を眺めていた。

「いけないのかな…そろそろ覚えた方がいいと思うんだけど」

私は小さく悲鳴を上げながら、後ずさる。

「いや…でも…私…男の人に喜ばれるような…その…」

「あっ…ごめん…そういうことじゃなくて」

グリフさんは突然視線をそらして、気まずそうに頭を掻く。

「ウィツの変わりに、君に夕食を給仕してもらおうかと思ったただけだよ」

「あ…ああ、そういうことですよね」

引きつりながら笑顔を作る私。

「はは、何か誤解していたかな」

追い打ちをかけるようにグリフさんは私の頭をぽんと叩き、

「恐れ多くて…修道女を襲おうなんて度胸は僕にはないよ」

と、私をからかった。

(5)――

日も暮れる頃、エリゼさんから厨房で給仕の注意点を聞かされる。そのこと自体は教会でやっていたことと変わりはない。

上級の司祭や寄付者の貴族をもてなすために、修道女が食事を運び給仕する経験は私にもある。

そういった意味では、慣れている仕事とも言える。

もちろん、あまり笑えない失敗談も伴うが…

食事を出す順番と片付ける順番を書いたメモをエプロンに忍び込ませると、私は大きく息を吸った。

他の人と違い、出が貧しい私は前菜と主菜の区別があまりよく分からないので、このメモが重要なのだ。

「まあ正餐ではないから、堅苦しくなくていいですよ」

エリゼさんは配膳台に皿を並べながら優しく声をかけてくれた。

これを持っていつて、グリフさんが食べる見守り、順に片付けて

いく。

うん、簡単な仕事である。

もちろん手が滑らなければの話だが……って、相変わらず失敗前提だなあ、私……

「グリフさんの好きなワインは……今日はお肉だから……」

エリゼさんはぶつぶつ呟きながらワイン棚を物色している。

後ではウィッツさんが鼻歌交じりにサラダを作っていた。

朝から顔を合わせていなかったが今日は少し機嫌が良さそうである。

「それにしても急にジゼルに給仕させるなんて……どうしたのかしらね」

エリゼさんにはこの話は寝耳に水だったようだ。

「さ……さあ……私にはよく分かりません」

私はウィッツさんをちらつと見て口ごもった。

たぶん昨日の醜態はグリフさんも覚えているのだろう……

本来、使用人と主人は食をともにすることはない。ましてや一緒に飲むことなんて、お堅い貴族が聞けば卒倒するような話だと聞いたことがある。

まあグリフさんはそこら辺の戒律やら規則には緩いし、当人も認めるとおりの一人で飲むのも寂しいからとウィッツさんに付き合わせるのは問題ないのだろう。

でも……昨日のあれを許容するのは……さすがのグリフさんでも、緩すぎると思うらしい。

だから私にお呼びがかかったのだろうか？

「……？」

エリゼさんも私と同じ方向を見ながら首をかしげていた。

「ウィッツは何か心当たりあるの？」

「いえ」

彼女はあっさりと否定して、振り返らなかった。

その姿にエリゼさんは苦笑いしていた。

もしかしたら…エリゼさん…知ってる？

ウィツさんがなぜ平然としていられるのか不思議に思いつつ、私は自分の仕事に戻る。

戸棚からコルク抜きを取り出すとグラスを一つ置いた。

「一応いつも通り用意したけど…」

グリフさんからお酒を勧められても、あなたはうまく断りなさいね」

そう言いながらエリゼさんは配膳台にワインの瓶を置く。

「はい」

私は表情が強ばらないよう、笑顔を作るのが精一杯だった。

「まあ…この家は使用人との関係がすこし雑ですけど…節度を守らなきゃお仕置きですよ」

にこにこと曇りのない笑みを浮かべるエリゼさん。

> i 1 7 0 6 9 — 2 3 2 4 <

「使用人が主人とお酒を酌み交わして、あまつさえ主人に半裸で絡むなんて下品なこと、あなたは勘弁してくださいね」

引きつる私とは対照的に、ウィツさんは笑顔でレタスを切り刻んでいた。

いろいろな意味で恐ろしい人である。

(6) —

「失礼します」

配膳台を押しながら、初めてグリフさんの部屋に入る。

グリフさんは机で何かを書きながら仕事をしているようだ。

その部屋は長く窓が開けられていないかのように、少し空気がよどんでいる。

「ああ…そんな時間か」

胸ポケットから懐中時計を取り出すと、グリフさんはそれに目を

落とす。日はとうに沈んでいたが部屋は机のランプだけが灯っていた。

「よろしく頼むね」

グリフさんは立ち上がると食卓へ移動する。

私は手際よく壁に掛かるランプに火を付けると、椅子を引きグリフさんを座らせた。

テーブルクロスを引いて、食事を…… って

「……」

前菜の皿が二つある。蓋をかぶせる前は一つしかなかったのに……

混乱した私の動き止まる。

「向かいにもう一人分用意して…君も座って」

グリフさんが助け船を出してくれた。配膳台の下段にもう一組のナプキンとテーブルクロスがしまっており、

「…あの……」

「いつものことだから」

まじまじと私は見つめられながら、前菜をテーブルに置く。

「いつもウィツと一緒にご飯を食べて、その後飲むんだ」

「でも…主人と使用人は…」

戸惑いながらも二つの皿を私は並べた。

ウィツさんがいつも一緒に食事をしていることは知っているはずなのに、何で私はそんなに困っているのだろうか……

建前を前面に押し出して、何とか給仕に逃げ込みようとしている私に、この時私はまだ気付いていなかった。

「大丈夫、気にしなくていいよ」

向かいにグラスを置くとグリフさんは自分でワインのコルクを抜いた。

「楽にして、僕も手伝うから」

「こ、困ります」

今度は配膳台から自分で皿を取ろうとするグリフさん。

慌てて私はその手を止めた。

「私の仕事です」

あまりに勢いよく手を握ったために、言葉も少し強い口調になってしまった。

グリフさんは押し黙り、俯く。

「……」

どうしよう…空気が重い…

自分がいけないことは分かっている。

いや、でも使用人と主人の関係ははじめ付けろってエリゼさんに言われているから、この態度もおかしくない。

そもそも私が言われていたのは給仕の仕事である。

取り乱して震える手を押さえつけて皿を取ると、何とか私は二人分の食事の配膳を完了させた。

私の仕事が終わったのを見ると、グリフさんは大きく深呼吸した。

「すつ、すいません」

とつさに怒られると思って 深く頭を下げる私。

何を謝っていいのか分からないが、グリフさんの気分を害しているのは間違いない。

「…違うね…僕が悪いんだ」

グリフさんはそっと私の手を押さえた。

「…君の仕事を奪おうとした僕が悪いよ」

「……」

彼はぐるりとテーブルの方に向き直り食事に手を付ける。

「まずはワインをもらえるかな？」

「……」

私は何も答えられず、グリフさんの空けたワインをグラスに注ぐ。

グリフさんは行儀悪くそれを一気に飲み干した。

「君は何をそんなに怯えてるんだい？」

肩がびくんと跳ね上がる。

「……そんなこと……ありません」

自分でも嘘と分かるぐらい声まで震えてきた。

「……エリゼから守れといわれた手順が守れないのがそんなに恐いかい」

その手にはいつの間にか食堂でもらったメモが握られている。

エプロンから抜き取られていたようだ。

「あつ……」

「それとも僕と一緒に食事をするのがそんなに嫌なのかな」

そう言つとグリフさんは向かいの椅子を指した。

少しその眉がつり上がっている。怒っていないようには見せているが、明らかに私に対して苛立っているようだ。

「……」

泣きたくなくなるような気分で、私はグリフさんの向かいに座る。

俯きながらも上目遣いでちら見すると、グリフさんは今度は少し

困った顔をしていた。

「……嫌なんだね」

その質問には答えられない。答えてはいけない。

でもこれでは肯定したも同じだ。

そう、正直……怖い……

自分がこの館にいる意味が、臍氣と形作られつつあるからだ。

今までも使用人の二人とは気軽に話せるようになったが、グリフさんには話しかけられないと答えることはない。

その自分の行動の意味に遅れて気付く。

何となく避けていたのは、そう……そういう意味だ……

「分かった」

突然グリフさんの顔つきが変わる。

昨日見た無表情がそこに浮かんでいた。

「君が自分の意志を持つ必要はない」

「……」

この人、何を言ってるんだろう……

おかしいな……

ここ最近…引つかかることだらけだ……

私は視線を落とす。用意されたご飯はとてもおいしそうだった。

「いいから食べるんだ」

「はい」

二人とも無言で食事に手を付ける。

考えたくはないが、浮かび上がった違和感を整理していく。

ここに莫大な額と引き替えに拾われる。とりあえずエリゼさんはその額のことは気にしなくていいと言われた。気まぐれで助けてくれたとグリフさんは言う……

そう、もう少しで繋がりそうなのに……頭がその答えを拒んでい

る。
作法に気をつけながら私はフォークを手取る。

肉に手を付けるとグリフさんが私のグラスにワインを注いだ。

「…すいません…私は…」

「お酒は飲めるだろう？」

有無を言わさぬ口調に、私に選択肢はなかった。

仕方なくグラスを口に付ける。お酒を飲むとどうなるか、昨夜ウイヅさんによく見せつけられているのだが、もうどうすることも出来なかった。

酸っぱい味が舌を包む。とても、おいしいとは思えなかった。

「……」

何か変な雰囲気である。

グリフさんは戸惑う私に小さな笑みを向けている。

つられて私は引きつった笑顔を返す。

「そう、それでいいんだ……」

「……」

やっぱり…いつものグリフさんと違う。教会から追い出された後、街の酒場でこんな風に男性に口説かれたことがあったが……それともちよつと違うような……

「僕になにか言いたいことがあるのかな」

私は自分がグリフさんをずっと見ていたことに気付いた。

「……疑問が頭をもたげて気持ち悪いんです」

デザートを食べながら私は顔を上げる。

問いかけたい言葉が自然と出てきた。

「グリフさんは……何で私にここまで……してくれるんですか」

「……どうということかな？」

突然、声が低く落とされた。警戒したその声には私は息を飲む。

でも……聞かないと……もうここにいるのが辛くなる……

そう……あの時と……ウィツさんとグリフさんの関係を聞いたときと同じだ。

勇気を持って私は、次の言葉に繋ぐ。

「教えてください……この国の税収では、すこし大げさな金額です」

彼はハツと目を見開いて、私を睨みつけた。

答えは返ってこない。

もう少し直接聞いた方がいいだろう。

「私に……何をさせたいんですか」

私の言葉にグリフさんは大きくため息を付いた。

一種、悲しげな表情を浮かべると、

「いつまでも隠せるとは思っていなかったよ」

と、つぶやき、自分でワインを注ぐ。

「そう、ただの使用人に払える費用じゃない。

君には別のことをしてもらいたいから、ここに入れたんだ」

覚悟していたとはいえ、その言葉に私は衝撃を受けた。

意味することは一つである。

「分かりました」

そう……初めから拒める立場ではない……何せ、私を「買って」くれた人なんだ……

私はフォークを置き、気をつけの姿勢のまま目を閉じる。

心の中では必死にそういうことじゃないと否定していたさっきの

グリフさんに、嫌気がさしていた。

どうせ…男の人なんて…考えてることは一緒だ…

「待った、勘違いしないで欲しい」

「…」

そう言われてもこの状況で何が違うと言っただろう。

いい加減、煮え切らない態度にとうとう腹が立ってきた。

「いつまで紳士ぶるんですか！」

私はやけくそで立ち上がると引きちぎるように胸元のリボンを緩める。

「私だって子供じゃないです。」

教会を追い出されてから…街でいろんな光景を見てきました」

その声は、いつの間にか叫び声になっていた。

もしかしたら…涙すら浮かべていたかもしれない。

「……」

「街から追い出された女や子供を金で売り買いする市場だって知ってます」

私をあんな額で買って、他に何をしたいんですか！」

やはり不覚にも涙がこぼれてくる。

「馬鹿にしないで、抱きたいなら抱けばいいじゃないですか！」

グリフさんがくすりと笑う。

彼はポケットから何か…鍵をとりだししゃくり声を上げる私に投げ渡してきた。

「君を抱こうなんて、そんな気にはなれないよ」

かーっと頭に血が上る。

まるで眼中にないともいう言い方だ。

彼は手を伸ばし、私の乱れた髪を直す。

「君はただ、彼女の変わりにそこで笑ってくれれば、それでいいんだ」

私を置いてグリフさんは、廊下に出ていった。

(7)――

「……まあ」

エリゼさんは苦虫をかみつぶしたような表情で椅子に座る私を見ていた。

ウィツさんは相変わらずの無表情を崩していない。

二人が部屋に飛び込んできたとき見せた顔は、こつても対称的だった。

「僕はもう寝るよ」

そう言つとグリフさんは追いやるように私の肩を掴み二人の方に歩かせる。

私は涙が止まらなく、それに、何で泣いてるかも分からず当惑していた。

抱く気がないと言われて悔しいのは確かだが、なぜ悔しいのか分からない。

それ以上に、もっと恐ろしい言葉を聞いた気がする。

「ジゼル……」

戸惑いながらも、エリゼさんは私を優しく抱きしめてくれた。

急に自分が惨めになった気がする。

「……」

背後では食器を片付ける音が聞こえる。

こんな状況で淡々と仕事が出来るのがウィツさんのすごいところだ。

「行きましょう」

私の背中を押すように、ウィツさんはみんなを外に連れ出した。

食堂に戻ると、ようやく私は落ち着きを取り戻してきた。

締め付けられるように苦しかった息が少し楽になってくる。

「何があつたんですか？」

すこしきつい口調でウィツさんが問い詰めてくる。

「何かグリフさんに失礼なことでもしましたか」

不快感を隠そうとしない口調に、また私の涙がぶり返してくる。

「まあまあ、泣いてる女の子をいじめないの」
間に入っただのはエリゼさんだった。

「それに…あなたももう察しは付いてるんでしょ」
ひょいと私の手から鍵を取り上げると、指先でくるくると回してみせる。

ウィズさんは顔をしかめた。

確認するように私のエプロンドレスに手をやると、結び目をじつと見る。

「本当に何もなかったんですね」

「そう…残念なことだね」

私の口元が歪んだ。

「……」

何か酷いことをさらりと言われている気がする。

エリゼさんは私と目を合わせようとしめない。その代わりにおもむろに私のエプロンだけを器用に外すと、

「ジゼル、今日は寝なさい。あなた…疲れてるでしょ」
とぼんと肩を叩いた。

いつもなら優しいと感じるところだが、今はその態度に殺意すら覚えんばかりに私は心を揺さぶられていた。

「…だまって…」

私はひと言呟いた。

今、初めてエリゼさんに反抗した気がする。

二人とも私の口調に驚いたようで、どうしていいか戸惑っている。

だが……かまうものか。

私の思考が、遅れて二人の言葉を処理し始めた。

そう…「残念」にも、何も無かったのだ。

まるで私が……情婦として扱われた方がよかったといってる人に、今は気なんか使いたくは無い。

「嫌って……あなた」

「ちょっと知りたいことがあります」

私は立ちすくむ二人を後目に、頭のリボンを外してそのまま床に落とした。

よろめく足下は、自然と書斎に向かっていた。

(8)――

そう、答えは初めからここにあったんだ。

形にならない答え、違和感……みんなが私を見る目……

グリフさんの言った「彼女の変わり」が答えだ。

書斎には、確かまだ片付け終わっていない本の山がある。昨夜髪を切ってもらったときに見つけ日記は、そこに置いたはずだ。

読むのは悪いとすぐ戻したのだが、ちらりと見えた日付は半年以上前のもので、頁はまだ本全体の半分と過ぎていないものだった。

そこに、その時感じた違和感の正体が分かっていた。

「……」

まだ書くことの出来る日記が、うずたかく積まれた本の山に放置されているのだ。

私はその表紙をめくる。

約一年前の日付からその日記は書かれていた。

(9)――

大公歴四八五年三月三一日

もう何日同じ天井を見ているのか分からない。

きっかけは身体の力が突然抜けて、階段から落ちてしまったことだった。

足は見る間に腫れていき、あつという間に体重を載せることが出来なくなってしまった。

辛い日々が続いている。

最初は落ち込む私をからかい半分に「おっちょこちょいね、あな

たは」と笑うウィツの口数が最近少ない。

嫌な予感はどうやら当たりのようだ。

身体全身が芯から痛む。骨がきしむような感覚でよく眠れない。

今日もベッドに横たわったまま、ただ過ぎる時間を過ごしていた。

四月三日

今日、ウィツが街の司祭を呼びつけた。

あの娘は必死に表情を隠そうとしていたが無駄な努力に見えた。

目を腫らし、隈を作っているのは誤魔化せない。

あの娘は知っている。私の叔母が亡くなった時の様子を私から聞かされていたのだから。

そう、同じである。身体の骨という骨が痛み、衰弱して死んでいく。

我が家に伝わる知られざる呪いといってもいいだろう。それが私の番ということだ。

代々誰かがそうやって死んでいくのだ。

一族に一代に一人だけ。

それはまるで悪魔に捧げる生け贄のようである。

どうしたらいいのか考えられない。

これは、悪い夢なのかもしれないと思うと、ほんのすこしだけ楽になる。

五月二十五日

これは受け入れるべきことなのだろうか。

エリゼに抱えられ客間に移ってみた。暇つぶしにピアノを弾こうとしたのに、手が動かない。あげくに、座ることすら辛いなんて、考えられない。

どうしてこんなことになったのだろうか、自分の体が自分の物ではないようなのだ。

六月十日

庭もいじれず、ピアノも弾けず、ただ寝るだけの毎日に苛立ちを感じる。

動くことがもどかしい。体中の痛みは消えない。
どうして私なんだろう。

六月十五日

グリフが自分の家での仕事を終えて返ってきた。

エリゼからの手紙で話は伝わっているらしい。声を殺して私を抱きしめる彼に、私はひと言も答えられなかった。

今日一日は、エリゼやウィツの変わりに彼が私の身の回りの世話をしてくれるといってきた。一連の出来事で使用人にかかる負担も大きかったようだ。

ウィツが熱を出して倒れたという話を聞いた。

彼女の変わりにグリフが私の身体を拭くという。情けないと思いつつ、甘えることにした。婚約者なら、それくらい許されてもいいだろう。

やせ細った身体を預けながら、私は彼と公国のための義務に費やす決意を伝えた。

六月十七日

覚悟はしていたのだが、努めを果たすことはとても辛い。気絶するような痛みが私にのし掛かる。

それ以上に、気を使いながら私の身体に触れる彼が痛々しく悲しい。

こんな情事に彼が満足できているとも思えない。

だが、これは私の我が侘でもあり、義務でもあるのだ。

八月二日

かなりの期間、日記を書くことを止めていた。何も日常に変化が

ないからである。

そう、こうしてここに日記が書かれるということは、変化があったのだ。

医者がうれしい知らせを伝えてくれた。

「ご懐妊です」という言葉を聞いた私は、気が触れたみたいに絶叫したらしい。

よく覚えていないが、あの日から続いている生きていることへの後悔が、すべて喜びに変わったんだ。おかしいといわれても、叫ばずにいられようか。

十月四日

新しい命が生まれるその日まで、私は生きていられるのだろうか。せめて十六歳の誕生日まで生きることが出来れば、この子を守ることで出来よう。

寒くなるにつれ、日に日に体調が悪くなる。不安だけが私の心を占めている。

一日を通して疲れて眠り続けることも多くなった。あれだけ大好きだったピアノも、最後にいつ触ったのか思い出せない。いや、そんなことはどうでもいい。一日中寝ていようが、身体がどんなに痛もうが、生まれてくる命を守り抜くまで身体が持つてくれればそれでいい。

(10)――

「……え……やだ……」

日記がそこで途切れていた。胸がつまるような思いで私は頁をめくる。

よかった、何頁か先に……続きがあるようだ。

「……」

一気に読んで私は疲れてきた。目が霞み、文字がにじんで見える。とても楽しい結末が待っているようにはこの先思えない。文字を

読むことではなく、その文字を受け入れることが、自分の体力すら奪う錯覚にも陥っていた。

「続きは明日……」

私は誰に聞かせるでもなく、言い訳のように呟いた。

分かったことが、たくさんある。

やはりここに住んでいた人がいた……

私は日記を頭からもう一度、流し見る。

グリフさんのお嫁さんで、その子が……グリフさんの子供を宿して

……たぶん病気で死んだ。

生々しい文章に少し赤面しつつ、そのことの意味を考えてみる。

赤ちゃんが……今ここにいないことも考えて……長くは持たなか

ったんだと思う。

「……いや……」

座椅子に身体をも垂れかけながらその哀しみを想像してみる。自

然と涙がこぼれてきた。

でも不思議な気分がする。自分のことのように悲しくても、街で

お芝居を観ているような現実感の無さも同時に感じる事が出来る。

私の知らない時間に、知らない人が死んで、私の知っている人が

悲しむ結末を向かえる。

そう、そして私はみんなの様子からするとその娘と似ているらし

い……

だからここで感じていた違和感は、私を通してみんなこの娘のこ

とを見ていたから……

涙の変わりに大きなため息が漏れてきた。

グリフさんの言葉が頭に響く。

君は何も考えなくていい——

彼女の変わりに私がここで笑っていると……

「……何で、私が……」

悲しい気持ちと、やるせない気持ち——それ以上に怒りにも似た戸惑いを感じつつ、私は目を閉じた。

何だか……ひどい話である……

【4章】冷たい人形のほほえみを

(1)――

結局、一晩中眠れなかった。

すつきりとしらない頭を二、三度振ってから鏡で顔を見ると、その生気は失せている。

目の隈も酷く、いつにも増して自分ではない感覚があった。

「……」

昨日の話に傷ついているのは確かである。

死んだあの娘の変わりに、私がいるなんて……

私って何なんだろうって気分になる。

そこを深く突き詰めれば、循環的に負の感情が巡ってきそうだ。

「……よし」

無心で何かしてれば、少しはましになるだろう。恐らくそんな風に割り切ることなんか出来ないだろうけど……

カーテンを開けて外を見ると、玄関前に注文していた苗が置かれている。

あの店の人が朝一で持ってきてくれたのだろう。

でも、誰も指示を出していないのか、裏庭に置かれなかったのは

……

逆に考えればやることで増えると意味で幸いである。

食欲無いし、疲れ果てるまで苗を植えよう。

一日中、仕事すれば少しは寝れるかもしれない……

その時トントんと、背後から扉をノックする音が鳴った。

「ジゼル……ちょっといいかしら」

振り向くとエリゼさんが入ってくる。

まだ着替え終わっていないが……何かやることでもあるのだろうか……

朝に、食堂以外でエリゼさんと合うのは珍しい。

「これを預からせてください」

エリゼさんは椅子の背もたれに投げ捨てられたエプロンドレスをたたみながら、困ったように半開きのクローゼットの方を指す。

そこには前にもらった私服が掛けられていた。

「……」

無言で何が起きているか、悟る私。

つまりそれに着替えるということだ。

「あれは……彼女の服だったんですね……」

その言葉にエリゼさんの口元が歪む。

小さく肯定の頷きが返ってきた。

「……もう……使用人ですらないわけですね、私は」

私は感情を込めずに言った。

それに、正直いって……そう思われていたとしても。私の中には感情はなかったのだ。

「今さら……隠し立てしても仕方ないとの……グリフさんからのお言葉です」

私の口調に同調して、エリゼさんも声の調子を落とす。

「庭の仕事だけはしていいとのことですよ」

そして後は、本を読んだりピアノを弾いて過ごせばいいと、エリゼさんは続けた。

「……」

まずは届いた苗を裏庭に移さなくてはならない。

本当は誰か人出が欲しいところだったが、私は少し意地にもなっていた。

半分荷物を下ろし、力に任せて台車を押していく。

それを二回繰り返し、昨日のお風呂の残り湯を花の苗に掛けてあげる。

置き場所は……昼間は日陰になる場所を選んだから、簡単に土が乾くこともないだろう。

淡々と仕事をしていても、ちっとも楽しくなかった。

少しは癒えるかと思った心も、朝に出鼻をくじかれたみたいでど

うしようもない。

もう少しおしゃれじゃなく…汚しても気にならないような服がなか、明日聞いてから続きをしようとは私は道具を放り投げた。

どうせ時間が自由になるなら日記の続きを読もうと思う。

あの娘の続きが気になる。

どういつ最期を向かえたにせよ…私にはたぶん知る義務がある……
「ジゼル、ちょっといいかしら」

振り向くと、エリゼさんが深刻な顔を見せながら立っていた。

(2)――

「昨日の鍵は覚えてるかしら」

エリゼさんは館に入るなり切り出した。

そういえばあの時グリフさんから投げ渡された鍵があったことを私は思い出す。

今の今までそれが何を意味しているか、考えなかった。

「あなたに、もう一つ教えなくてはならないことがあります」

「……」

いつの間にかウィツさんも、後から私達の方に向かって歩いてきた。

私は彼女の様子を見てたじろいだ。まだ夜じゃないのに、顔がほのかに赤い。

「ウィツさん…飲んでますね」

「……」

彼女は答えず、私と目も合わせようとしない。

「どうでもいいのよ、そんなこと」

驚いてエリゼさんの方に顔を向けると、まるで意に介していないようだ。

「では……」

エリゼさんは重々しく口を開いた。

「もうひとりの住人を紹介します」

その言葉に顔をハツと上げる私。

まさか……

なにか言葉の響きに、かすか期待が浮かんできた。

でも…あの娘が生きてるから…何になるんだ…

「ウィツ…準備はいいかしら」

「……はい…着替えは…終わっています」

やっと聞き取れるような小さな声が頭に響く。

私は手を引かれるまま階段を上がった。

二階の突き当たりに、その部屋はあった。裏庭を見渡せる側に位置して、グリフさんの部屋の隣りにあるそこは、私には物置と教えられていた。

「では行きましょう」

その扉が重々しく開かれる。

「奥様のお部屋です」

カーテン越しに西日が差し込んでいる。

もうお昼過ぎていたんだと…私は光に目を細めながらぼんやりと考えていた。

奥様…あの娘の部屋……

その時、つんと刺激臭が鼻をついた。

急に喉元が締め付けられ、吐き気をもよおしてしまった
じんわりと目も痛く、涙が浮かんでくる。

私は何か異変はないかと、恐る恐る辺りを見渡した。

「――！」

ベッドの上に自分の姿があった。

私とうり二つの少女が…微動だにせずに横たわっている。
青白く艶のない肌……

あまりの驚愕に、足ががたがた震える。

「こちらが前公爵、ノーム・シエラン様です」

エリゼさんの声が遠くから聞こえてきた。
頭がくらくらとしている。

「……これ」

私はゆっくり枕元まで歩くと、その頬に触れてみる。

「ひっ！」

冷たく……でも柔らかい感触が伝わってくる。

「亡骸の中身を取り出して、保湿と防腐の薬品を染みこませてあります」

……私が振り向くと、ウィツさんが淡々と呟いていた。

つまり剥製……ということだ。

「誰が……これを……」

「あなたもこないだお会いした……グリフさんが連れてきた職人です。私と彼も手伝いました」

なんて……ことを……

足下が揺らぐ。まるで床が抜けたみたいだ。

ウィツさんがよろめく私の肩を支えた。

「大丈夫ですか」

と、彼女の声が遠くから聞こえてくる。歪んでいるような声が――

「触らないで……」

目の前に悪魔がいた。

「……ジゼルさん？」

そう……善人の心に悪魔が宿る――

そんな言葉を昔聞いたことがある。私の肩を掴む人も……

「触らないでよ！」

私は、自分でも呆れるほどの声で叫んでいた。喉が灼けそうなくらい、熱く痺れていく。

私に突き飛ばされたウィツさんは、よろめきながらも何と体勢を整えると、口を開けたまま私を見つめていた。

「ジゼル…さん？」

なんで、人に…こんなことができるんだろっか？
感じたことのない恐怖に、全身が震え始めた。

「来ないで！」

触らないで！」

私がわめいている。

私の言葉じゃないみたい……なんか…遠くから聞こえる…

グリフさんは隣にいるはずなのに 物音一つ聞こえてこない……

「いやあああああ」

気がつく、私は自分の髪をかきむしっていた。

自分の服がまとわりつくように身体を締め付ける感覚が襲ってくる。

ボタンをはじけ飛ばし、私は上着を脱ぎ捨てた。

とにかく…少しでも自分のカタチを変えないと、壊れてしまいそ

うだ。

パチッ

乾いたことが骨を伝わり私に届く。

ウィツさんは無表情で私を叩いていた。

「……」

私は糸が切れたかのごとく、力が抜けてしまった。

腰がくだけるように床にへたり込むと、もうそれから…感情がわき上がってこない。

「静かにしてください 隣でグリフさんが寝ております」

「……」

何かを言い返そうにも声も出てこない。

息が…… 息の吸い方が分からなくなってしまったのだ。

ようやくじんわりと痛みがやって来た。

次を感じるのは、締め付けられるような息苦しさ。

「もついいでしょう」

焦点の合わぬ目が、私に近づく彼女を捉える。

腕を引きずるようにウィツさんから距離を置かれると、エリゼさんは落ち着いて息整えるようにと、私の背中をさすってくれる。

自分の呼吸の調子が狂ったように乱れている。

「こん…な…ひどい……」

ようやく、洪水のような鳴咽がやって来た。

(3)――

人の身体が暖かいこと初めて知った。

エリゼさんは私が泣き止むまで、ずっと抱いてくれたらしい。

エプロンをずいぶんと汚してしまったことに、私は軽い罪悪感を感じてしまった。

ようやく少し落ち着いて来たので、私はエリゼさんから離れると、自分のハンカチで顔をぬぐう。

「……」

手の平に残るあの冷たさは、まだ消えそうになかった。

「お腹すいたでしょ」

エリゼさんはニコリと笑顔を見せそう言うと、机に向かって立ち上がる。

…いつの間にか…彼女に手を引かれ、書斎に移っていたらしい……机からサンドイッチの皿を取り私に差し出すと、落ち着くまでここにいましうと部屋に鍵を掛けてしまった。

「味が……しない」

パン切れさえ重いと言わんばかりに、命令を聞かない私の腕を何とか持ち上げてパンを口に運ぶ。パサパサと喉に張り付くような感触以外、何も感じられなかった。

「そう、私は大丈夫だけど？」

……おかしいのは私の身体か…

今までの感覚の不一致からか、その異常事態も妙に納得がいく。

「……」

足を抱え、床にお尻を付けて私は座り込む。

「さて…と…どこから話しましょうか…」

エリゼさんは私の前で膝を突いて語り始めた。

「あの娘は…ノームといいます」

淡々と、彼女は私がここに来る前に起きた出来事を教えてくれた。
ある日、突然階段から転倒し、それから二度と立ち上がれなくな
ってしまった女の子…

死を悟り、必死にグリフさんの血を残そうと頑張った私と同じ年
の娘…

病気で倒れ全てに絶望しながらも、夫の子を宿し、張り裂けんば
かりの声を上げたことは知っている。

でも…その赤ちゃんがあの娘…ノームより先に逝ったことは、
衝撃的だった。

大好きな人の子供に全てを託して…その希望が生まれて来れな
いなんて…

私だったら…どう…

「……」

……もう…想像が及ばない。

感情が想像の幅を振り切って、処理できなかった。

「その時は朝でした…」

私はその瞬間を思いやる。

「最期は…苦痛に歪んだ顔で…私たちに『ごめん』と呟いて…ノ
ームは逝きました」

そのときのみんなの様子はとうだったのかと、私は尋ねてみる。

「グリフさんは…そうですね…今のあなたみたいでしたよ」

「……」

一日中ノームの亡骸から離れず……

葬儀の準備もできず…

ご飯すら食べられない……

エリゼさんはこの館に包まれた悲しみの空気を、ありのままに話
してくれた。

そう、こんな話は自体は子供の頃からずっと聞いてきた。

孤児院で、司祭が話す街の人の不幸な話。

そこで語られる神の言葉の意味…

…私はやはりシスターには向いていなかったのかもしれない。

この場で、どういう言葉をかけていいかわからず…

しかもふさわしいのは神の言葉ではないことだけは確信している。

「次の日にやって来たのはある剥製職人でした…」

ついに話が核心に及ぶと、それまで努めて無表情を貫いていたエリゼさんも、思わず顔をしかめる。

「私の反応はあなたと同じ…でもウィツは…手伝いました…」

「……」

私は思わず息をのむ。

そこでどんなことがあったのか、想像に難くない

これでも修道院の病院で、奉仕活動をしてきた人間だ。

人の亡骸は腐敗する。

それを防ぐには…体の中身を掻き出して…なにか…腐敗を防止する塩か薬品を擦り込んでいく必要がある。

それは常軌を逸した行為である。

「ウィツはあんなに笑う娘だったのに、それ以来あの調子です」

「……それで…お酒ですか」

エリゼさんは小さく頷いた。

「そしてグリフさんは今や、館から出ようとはせず執務もできない状態です」

口を歪めながら彼女はつぶやいた。

まだエリゼさんには、この狂気を狂気と思う心は残っているようだ。

黙って見守ることが同罪とはいえ…

「今は私が代行しています」

あなたが何かきっかけになってくれれば…少しはいい方向にと、期待してるんです」

「……」

でも… ippitai 私に何をしろというんだろ…

(4) —

エリゼさんとも仕事上の会話をする以外、無口を貫く時間ももう何日目だろうか…

与えられた自由時間を正直、持て余していた。

何もせず、未完成の庭で空を眺めている。ただそれだけである。

夜は夜で、あの日からグリフさんにご飯食べる時間が続いている。

ただ笑ってればいい…

彼は冷たい笑顔を浮かべそう言う。

そつ… だから私は精一杯笑うことに決めた。

そこに会話はなく、何とも言えない緊張感が二人に流れているだけだった。

無表情でウィヅさんは給仕を続けている。

ここ数日は人目をはばからず、台所で酒瓶を目にすることも多い。まったく… この人の考えていることも分からない…

二人とも… 狂ってる。

あのとき感じた嫌悪感は、何一つ変わらず残っていた。

それに、まともに思えたエリゼさんも… 正直同罪だと思つ。

「じゃあ、今日はもういいよ。お休み」

追い出されるように私は部屋を出た。

今日も、何も言えなかった。

「……」

きつと、私も同罪なんだろう。

この狂気に、ただ笑っただけしかできないんだから。

修行が足りないと言えばそれまでだ。

この事態を打開する神の言葉の一つぐらい、私の頭も何か思いつかないのだろうか…

ただ今は、二人が怖いのだ。

そして、いつまでこんな時間が続くのかわからない。
何か深い落とし穴に沈み込んだように、私の心にもやが掛かる。
神さまはこの先、私達に救いを用意してくれているのか、自信は
なかった。

まあ強いて言えば…一緒に寝ると言われただけの救いはある。
私は自嘲ぎみに無理矢理口角をつり上げて見せた。

「いや……」

その方がもしかしたら、少しは救いなのかもしれない
私を人と見てくれるんだから…

そう…エリゼさんの言葉もあながち間違っていないかったわけだ……
私は自分の部屋に戻ると今日も寝付けず、希望も持てないままベ
ッドに潜り込んだ。

(5)――

私は久しぶりにノームの日記を手にとった。

読み上げたのは二人の間に子供が出来たところまで…

あの日、この先の結末を知ってしまった以来、読む気を無くして
いたものだ。

今日は…暇にかまけて、少しだけ時間を進めてみようと思う。
震えるような、弱々しい字を、私はゆっくりと追っていく。

十二月二日

そういえばこんなものを書いていたことを思い出した。

もう、ペンすらすらうまく握れないようだ。

こんなことをして何になるのか。

たぶん神様の嫌がらせの前では全てが無意味なのだろう。

全てが憎らしい。

何で大好きなあの人の血を残すという、ささやかな願いすら許さ
れないのだろうか。

私が生まれたというのに、私の血は残すのが許されないというの

か。

返す言葉が無い。

今は破門された身とはいえ、私も物心が付いてから神の言葉を聞いてきた教会の人間だ。

そして司祭が、シスターが、こんな時投げかける言葉を知っている。

そう…こんな「ありふれた」悲劇に、主は何も答えてくれないのだ。

今の私にはもはや、上っ面にも聞こえる出来合いの言葉を聖典から取り出して、人はこの言葉に従えばいいと…

十二月七日

おかしい。時々自分がわからなくなる。自分の行動を反省しなくてはならない。

外からグリフとウィズがしゃべっている声が聞こえた後、私は手元の本を窓に向かって投げつけていた。

そして信じられないような声で怒鳴っていたらしい。

感じた感情は、嫉妬だった。

生きている人間が憎らしい。あの人の血を残せる人間がいることが憎らしい。

そんな考えがわき上がると、自分の行動が制御できなくなる。

いつか、残された時間ですら、自分が自分でいられなくなってしまう気がする。

この怒りを隠さねばならない。私が私であるためにである。

十二月十五日

最近私の周りに人がいることが辛くなってきた。グリフには相談せず、信頼できる二人を残して他の使用人に暇をとらせることにし

た。

貧しい公国で、元来、人の入れ替えも激しい家だ。私の最近の態度に不満を溜めていた者も多いと聞く。

誰を残すかは迷わなかった。

子供の頃から姉のように慕ってきたウィツと、分家のグリフが連れてきたエリゼの二人を選ぶことにした。

たとえ今後グリフの寵愛を受けたとしても、今までの貢献を考えれば許容できる二人だ。

そう、今でも私は公爵なのだ。家を維持することは考えなくてはならない。

今となつては、私のせいで、呪われた家に嫁ぐ貴族など望めるはずもない

だからこの家に残された者からグリフが選べばいい。そういう選択である。

たとえ従兄弟の血筋になるとしても、そうすればグリフを介してシエラン家の血筋も残るわけだ。

そう、考えただけでも気が狂いそうな話だ。

だが、私の知らない人間が彼を愛し血を残すのと、どちらがいいかは決まっている。

考えただけで気が狂いそうな話だ。

私がこの家からいなくなる日がもうすぐやってくるのだ。

「……」

なるほど…手が回らないといつてたのは人を減らしたからか…

ぼんやりと私は理解する。

何か物語を読んでいるような——曖昧な感情に私は嫌悪を覚えた。確かにここで起きた出来事なのに、文字を頭がうまく処理してくれない。

自分の考えも、どこか遅れてやってくる…そんな気持ち悪さ…視界を覆う日記の文字とともに、脳裏に鮮明なノームの像が浮か

んでくる。あの亡骸も含めてである。

頁の余白には何度もインクの切れたペンでなぞった跡があった。紙が破れんばかりに付いた痕跡からは、彼女の憤慨が、悔しさが、いろいろな想いが伝わってくるようだった。

日記には…まだ続きがある。残り少ない日々につづられた弱々しい筆跡を辿る。

気が付いたら寝ていたらしい。目が覚めるとエリゼが私の手を握っていた。私の涙が止まらないのを見て一晩中そこにいたという。なんて私は浅ましいのだろう。

嫉妬に狂っていた私がとても見苦しい。

今すぐいなくなればいいと、私なんて早く死ねばいいとそんな感情が頭をもたげる。

この気持ちをどう説明すればいいのか。

「……」

ここまでがこの日の出来事…

いつの間にか、私はノームの心に引き込まれていたようだ。揺れ動く感情に、激高と消沈に、私も怒りと悲しみを覚える。

本来文字を読んでいるだけなのに、無性にその椅子を蹴りたくなったり、涙があふれたり…

ひどく疲れを覚えてしまう。

私は少し震える指先を押さえて次の頁をめくった。そこにはさらに半月近く後の日付が書かれている。

—二月二七日

息苦しい日々が続く。やることも特にない。

怒りはとうに尽き果ててていた。

ふと、思い立ってエリゼが痛み止めにと持ってきた薬を全部飲んでみることにした。

痛みはあまり消えず眠くなっただけだった。

今日、ようやく目が覚めたらしい。一週間ほど寝込んでいたとのことである。

生まれて初めてグリフやエリゼの怒鳴り声を聞いた。

(6)――

「……」

つんとした臭いの立ちこめる部屋には布のこすれる音だけが響いていた。

音を立てているのは私ではなくウィツさんだ。私は口を固く閉ざしたまま彼女の作業を見守っていた。

ゆっくりと濡れタオルが少女の肢体を……その……何というか……死体を滑る。

ベッドに横たえられているノームの上半身はドレスがはだけ、その肌を露わにしていた。

そのあまりにむごい様に思わず息をのんでしまう。薄光に浮かび上がる輪郭に目を覆いたくなる気分だった。

私と同じく……そんなに大きくない胸の下からは、お腹にかけては大きな傷跡が走っている。たぶんそこから……亡骸が腐らないように薬を染みこませた綿を入れているのだろう。

目眩とともに、胃が締め付けられるように痛み出す。

つまり亡骸に傷を付け、その……ない……中身を掻き出した誰かがいるのだ……

私はノームの部屋を汚さないよう視線を逸らしウィツさんの方に顔を向けた。

目の前で繰り広げられている作業は改めて、私にノームがこの世界に存在しないことを実感させる。

「こんなことしてて、平気なんですか」

恐る恐る私は聞いてみた。

ウィツさんはこうして毎日ノームの体を拭き、埃を落とし、腐食

しないように努めているというのだ。

とても現実とは…まともな神経をしているとは…

逆に言えば気が触れたとしか思えない行為だ。

愛する人の亡骸を剥製にするグリフさんも…こうやって維持する
ウィツさんも――

ウィツさんは私の浮かべた表情を一瞥すると、くすりと口元を緩めた。

「だって…平気に決まってるじゃないですか」

少しも表情を変えず彼女はつぶやいた。

そしてなにが誇らしいのか、微笑を浮かべすつと立ち上がり胸を張る。

「これがノームとの唯一のつながりですよ」

声一つ震わせることなく、ウィツさんは言う。

私はこの瞬間、心の底から湧き上がる恐怖を感じる。

「さて、今日はこれでお終い」

ウィツさんは再び無表情に戻して小さくつぶやく。

「その水瓶をとってもらえますか」

と、目を細めたまま私の足下を指し示す。

「……」

私は何も返す言葉が見つからず、それを手渡す。

彼女は薬で濡れた手を拭きノームのドレスを整えていく。

「つながり……」

ようやく乾ききった私の唇が開いた。

「そう…この体がある限り、ノームは生き続けるの」

真っ直ぐ私の目を見てウィツさんはそう言うと、立ち上がって部屋を後にした。

「……」

ぱたりと扉が閉まったと同時に、私の恐怖も少し引いていく。

震える足が収まるまで私はノームの傍らの椅子に座ることにした。
生き続ける……本当にそれでいいの？

心の中でつぶやきながらノームの閉じた瞳を見つめる。
返事はもちろん戻ってこなかった。

(7)――

また、昨日と同じく食事の時間が来た。

「……」

「……」

部屋にいるのはグリフさんと私だけ。今夜もやはり会話もなく、食事の音だけが淡々と部屋に響いている。

こうして二人で過ごすのは何日目になるだろうか。

相変わらず彼から与えられた指示は単純だ。

表情は崩さない。しゃべらない。

馬鹿らしい……

だけど、これを守っておけば機嫌を損ねることもない。

私は思い出したようにグリフさんに笑いかけた。

相手は一瞬動揺を見せるも、すぐに取り繕い食事に戻る。

何を……考えているのだろうか……

彼は私の表情を一瞥すると、くすりと笑う。

今夜もそんな繰り返しだった。

笑顔で見つめ合う私たち……

知らない人が見れば、これも一つの情熱的な光景といえる。

ただし二人の間には得も言われぬ緊張感が絶えず走っている。

いったいいつまで……こんな儀式めいたことが続くのだろうか……

「ふう……」

神経がすり切れるような時間を経て部屋に戻ると、体から疲れがあふれ出してくる。

だが震える足を押さえ、寝間着に着替えると私は、燭台を手に自室を後にする。

そして暗く静かな廊下を抜けノームの寝室へと足を進めた。

死臭を隠す刺激臭は食後にふさわしくないが、ここでノームの日

記を少し読み進めておきたいのだ。

一月二日

年を越すことができた。

最近少しだけ体の調子がいい。本が読みたくなって書斎に寢床を移してもらった

これぐらいしかやることがない。ただ一日一日が無駄に過ぎていくだけ

なんで、私はまだ生きているのだろうか。

一月四日

所詮、本は本である。

私と同じように、死に行く物語の少女は荒れ果てた庭を使用人に命じて花いっぱいにしてもらって満足して死んだとある。

なんてくだらないのだろうか。

そんなことで満足して死ねるものなのか。

一月七日

今日見た物語。

やはり死に行く少女が悪魔と取引をして自分の記憶と視覚を引き替えに命を長らえるという話だった。

嫌な気持ちしか沸いてこない。

あまりの荒唐無稽ぶりに、途中で読む気が失せた。

一月八日

三人の説得で二日ぶりにご飯を食べた。

どうして、みんな私をかまうのだろう。

一日中ベッドで本を読んで、寝ている私に食欲があるわけなんかないのに。

もう、放つといて欲しい。

頭を振りながら本を閉じる私。

すっかり引いてしまった血の気が戻らない。

あなたは どうして欲しいのと、私は再び問いかけた。

「……」

これでいいの？

「……何か…答えて欲しい…どうすればいいか…教えて欲しい」

思わず声出ていたことに、私はこの時気付かなかった。

何が出来る、どうすればいい――

ぐるぐると思考が循環する。

何も出来ない自分が悔しくてイライラとする。

この部屋に息がつまり、喉が渇く。不快でたまらないのだ。

と、背後から扉の音が聞こえてきた。

グリフさんが無表情で私の様子を窺っている。

「ここにいたんだ」

一瞬視線が交錯し、私の表情が強ばった。

「声が聞こえてきたからね」

グリフさんはベッドの脇に座ると目を細めて、ノームを見つめる。

「今は、君はそんなに無理に笑わなくていいよ」

背中越しにそう言われると、グリフさんは押し黙る。

とりあえず私は、私…ジゼルとして振る舞えと、その言葉を受け取った。

半刻近くグリフさんはノームを見つめ、時に涙を落としていた。

「どうしたいんですか…」

渦巻く感情の中、私はとうとう我慢できず呟いてしまった。

「こんな現実逃避…みたいなこと」

彼は身動き一つせず答えてはくれない。

「おかしいです」

すっと息を吸い、再度つきかけた勇気を持ちだして私は言った。

「なにが…」

「だって、もうノームはいないんですよ？」

こんなこと、あまりにむごいことを…

私は自分の感情がだんだん制御できなくなってきた。

声を荒げたくない。グリフさんを怒らせてはいけない。でもその理性を、やり場のない怒りが打ち消していく。

「もう止めよう…ノームを埋めてあげましょうよ！」

「…君に何が分かるんだい？」

まずい。この言葉を言っではいけないのに…

「分からないです。こんな狂ったことなんで」

グリフさんの眉がつり上がり。みるみると顔色が赤く染まっっていく。

「私を彼女に見立てたって、なんの意味があるの！」

私はノームじゃ——」

その絶叫は頬に突き刺さる衝撃で途切れてしまった。

ブルブルと全身を振るわせながらグリフさんは固まっていた。

やはり少しの時間差とともに痛覚がやって来る。

「…」

平手で殴られた一瞬、部屋の空気がかき乱された。

死臭を隠す香水…ノームの臭いが漂ってくる。

再び私の怒りがふつふつと湧いてくる。

私はグリフさんの胸ぐらをつかみかかり、拳に力を入れ——

この時ばかりは何も考えていなかった。

私のとった行動に、啞然とする私はそこで固まってしまった。

「ご…ごめんなさい」

その短絡的な行動に私は後悔するも、もう手遅れだった。

幸い私の拳は目の前をかすただけだった……

でも、とたんにグリフさんの目は据わってしまふ。

同時に私の背筋に寒気が走った。

あんな言ったら、反発したら、彼の正気を失わせてしまふ…それ

は分かったのに…

落ち着いてノームの死を受け入れさせてあげようと、そう導こう
と思っていたのに――

「そうだね……」

突然グリフさんは私に抱きついてきた。

「ん…んん！」

そしてガチツと首根を捕まえて、無理矢理唇を奪われてしまう。

「じゃあ、これで終わりにしようか」

どん、と床に押し倒され、グリフさんに私の腕は押さえつけられ
てしまった。

あまりの出来事に声が出てこない。

「エリゼが領主の仕事のこと心配してうるさくてね…」

領主代行なんて自分の柄じゃないっていつてるし、だいたい子供
の頃からつきあいのある彼女を抱くなんて出来ないし。でも公国と
しては次の世代は必要だし、僕はノームを愛しているしだから…さ
つさと跡継ぎでも作ってこんなことは終わらせてあげるよ。そう…」

「……」

「君がジゼルってことはどうでもいい」

なにやらぶつぶつと小さな声で呟くグリフさん…

もう私はその狂気の目に悲鳴も上げられない。

いやだ、いやだ、こんなのいやだ！

混乱しているうちに服のボタンが弾け、胸がはだけて下着が露わ
になってしまう。

恥ずかしいというより――とにかく恐かった。

「…傷がないん…だね」

グリフさんは私のお腹を指先でなぞり、声の調子を落とした。

その描く線はまるで私の体を切り引き内蔵を掻き出すように――
彼の顔に失望の色が現れた。

「やっぱり…君は……ノームじゃないんだ」

じゃあ、と大きくため息を付くと、グリフさんは私のはだけたブ

ラウスを元に戻した。

「ノームに似ている人形をどうしようと…僕の勝手だね」

床に倒れながら私はノームと彼の顔を見る。

今まで感じなかった心の底からわき上がる悲しみを、この時私は初めて感じ取る。

そして…不意にノームが起き上がり助けてくれないか…そんな無意味な希望すら浮かんでくるようだった。

とりあえず体をよじりグリフさんから逃れようとするが、足下に男の人一人分の体重がかかっている状態ではどうすることも出来なかった。

「んう…ぐ！」

お腹を強く殴られた。

「ノームの人形なんて壊してやる…」

私は顔を強ばらせて目をつぶる。

首に両手をあてがわれ強く締め付けられる。

やっぱり…殺されるんだ――

私の心の冷静な部分が、こうなることを予測していたのだが実感が湧かなかった。

私の意識は次第に薄れていく。

脳裏に過ぎるのはここに来るきっかけとなった雪の光景…

そして…何故か首筋に感じる彼の人肌の暖かみ……

矛盾していると思っても…私には……どうでも…

でも…なんで…こん…なことに…

「……？」

目の前がチカチカと光っている。

体の全身に心地よい暖かみが戻ってくると同時に、

「グリフさん」

突然、のし掛かっていた体重が軽くなっていく。

白から黒、そして色を取り戻した視界に無表情のエリゼさんが立っていた。

「もう一度聞きます。何をなさっていたんですか？」

穏やか声とは裏腹に、冷たい空気がエリゼさんの方から流れていた。

私は咳き込みながらその様子を窺った。

「……」

「ノームの前で、愛人を囲おうなんて……少々節操がないようですが笑いながらエリゼさんが軽蔑したように私たちを見ていた。

正直あまりいい例えには聞こえない。こっちは殺されかけていたのに……笑えない冗談だ。

「……」

グリフさんは、何も答えず頬に手を当てながら……ばつの悪そうに部屋を後にした。

(8)――

「ごめんなさい。私も我慢できませんでした」

そう言いながらエリゼさんは舌をぺろっと出しておどけて見せる。

そしてグリフさんを殴った手を痛そうにさすっていた。

「……」

ようやく正気を取りも出した私はそんな彼女に冷たい視線を送った。

エリゼさんは表情を戻し顔を逸らす。

「私は……あなたがこの館に来たときは……」

死んだ人形より、生きている人形の方があの人を癒してくれる。

それぐらいに考えていました」

そしてどこか上の空のまま呟いていた。

「今だつて……大声が聞こえたからその扉の隙間から様子を見ていたし……」

「あなたが殺されそうにならなければ、止めないつもりだった」
「……」

その言葉に頬と眉が無意識につり上がる。全身に力が入り私の拳が握られた。

「最低よね、私たち」

「……」

「あなたを巻き込んで……こんなふうに傷つけて……」

今さら謝られても困る。確かに……命を救ってくれたのはこの人達なのに——裏切られた気分しか残らないなんて。

「許してくれとはいわない。だから殴りたかったらかまいませんよ」

エリゼさんは目を閉じ直立不動の姿勢をとった。何か覚悟をいるみたいだが、少し恐怖の色が見える。

「……」

ついその仕草を、私は可愛らしく思ってしまった。

私が何もしないでいると、エリゼさんはもじもじと戸惑ったような動きをした。

「あの……」

「エリゼさんは叩けません」

その言葉とともに笑顔を浮かべる私。

「本当に……優しい娘ね……あなたは」

彼女は私に優しく抱きついて、

「もう我慢できません」

震える声で呟いた。

「今日で解雇しますから……ここから出て行きなさい」

気丈に振る舞っているような裏腹、その目からは涙があふれていた。

「そしてここで起きていることは、早く忘れてください」

そこまで言い切ると、エリゼさんは堪えきれずしゃくり声を上げる。

私にまとわりつく彼女の体温が、いやに暖かく感じる。

そう……エリゼさんもどうしていいのか分からないんだ。

私と同じく分からないから、何とかしたいから——

その一心で事態がここまでおかしいことになったのだ。
エリゼさん声に、私はそう確信した。

この時ばかりは、肩越しに写るノームは笑っているように見えた。

「人形とまでいわれて、引き下がることはできません。」

ここから出るなら、少なくとも人になってから出て行きます」
優しい力で、私はエリゼさんを引きはがす。

「それに皆さんが悪い人だったら……きつと神さまは私をここには連れてきてくれませんよ」

そう宣言して、私は差し出された逃げ道を突き放した。

「でも、彼はあなたを……」

「それもきつと、なにかの間違いです。」

きつとこれでいいという確信が私にはあったのだ。

(9)――

そう……ほんの少し何かが間違っているのだ。

日記を通じて私にはノームの考えることが少しずつ分かってきた。
こんなことは、起こるはずじゃなかったんだ――

もう少し、やることが残っているようだ。

蠟燭を補充するため、私は台所へ向かった。

音を立てぬよう静かに台所に入ると、テーブルに突っ伏したウィ
ツさんの姿がうつすらと照らしだされる。

ここ数日の間に、すっかり違和感の無くなってしまった酒瓶が、
床には転がっていた。

耳を澄ますと、彼女は小さな声ですすり泣いているようだ。
「……」

私はそれに気付かないふりをして、目的だけを果たしてその場を
後にした。

気味悪い暗い廊下を進むと、今度は男の人の影が映る。

「ジゼル……」

グリフさんは月明かりに照らされ立ちつくしていた。
放心したような顔に、なにやら後悔の色が浮んでいる。

でも…一応あんなことの後なので、警戒しておくには越したことはないだろう。

「さつきは……」

強ばる私は、いつでも悲鳴を上げられるよう大きく息を吸い込んだ。

「…その……ごめん…君に酷いことを」

おどおどとグリフさんはつぶやいた。

そして私の顔も見えず、どうしていいか分からないようにうつむいている。

不意に私は、笑いがこみあげてしまった。

何故かさっきのことを許せる気分になったのだ。

「今夜は…みんな変ですね」

「……」

「だから、ゆっくり寝て…明日考えましょう」

それだけ穏やかな声で言うと、彼のことは頭から追いやって私は
ノームの部屋に戻ることにした。

今夜中に最後…最期まで日記を読むことにしよう…

一月二十日

誕生日を向かえることが出来た。恐らくこれが最後だろう。

日付を見ると、そう、倒れてからそんなに経っていることに気付いた。

ふと今までの日記を読み返してみた。

自分で書いた文字が照れくさい。

ふと、こないだ読んだ本の続きが気になった。

記憶を失った少女は、世界を放浪し、たどり着いた辺境の地で一人の男と恋に落ちる。

そしてそこで新たな人生を歩むという。

正直、最後まで読んでみても満足いくような面白い話ではない。
まして、私に当てつけるような そんな安易な幸せがあつてたま
るか、今日は珍しく感情が動く。
きつと書いた人は満足なんだろう。
少なくともこの文字には

「……」
めくった先の頁は文字がかすれ、滲んでいる。
なにか言いしれぬ感情に、私も頭が真っ白になり考えることが出
来なかった。

そうだ 文字に、この人が残っているんだ。
ここに残されている不自然な物語の意味なんだと気付いたときに、
私の涙は止まらなくなってしまった。

震える手を押さえ日記を書くことにする。
このことに気づいた人は私が初めてなのだろうか。
そう、家系に伝わる呪いを、記録として残すわけにはいかないの
だ。

私という存在は、死をもって、「病死」として歴史の中に埋もれ
てしまう。

そしてグリフが新たな血として公国を引き継ぐ家の家督となる。
ここにあるつたない物語の本の山は、私のように消されゆく人達
が物語として残した想いなんだと、その意味が私に重くのし掛かる。
そう、やっと残せるものが見つかったのだ。

「あ……ぐっ」
ノームが残した文字をなぞり、私は口に手を押さえ嗚咽をこらえ
る。

彼女が何を言いたいのか……何を残したかったのか、それを噛みし
めながらゆっくりと消化していく。

長く止まっていた呼吸の調子をようやく取り戻したときには、私は日記を強く抱きしめていた。

そうしながらノームが読んだであろう物語を思い出す。

そこに書かれていた人々には、つまらない…そう評していた物語には優しい人の姿があふれていた。

頭の中で物語と日記と現実が交錯する。

そこには暖かい家族の像が浮かび上がってくる。

私を受け入れてくれた人達の姿を思い起こす。

それはどこか違和感があるものだったけど、それは戸惑いながらだったけど…優しい人たちがそこにいた。

やっぱり…少しだけ間違ってただけなんだと…

「あなた…まだ起きてたの？」

不意に肩を叩かれた。背後にエリゼさんがいたことに、私は気付かなかったようだ。

「…グリフさんとウィヅさんは」

「二人ともつぶれてるわよ」

苦笑いしながらエリゼさんは答えた。

「だからもう安心して寝ていいわ」

少し悲しげにそう言つと、彼女も私から目を逸らす。

やはり後悔の念がそこに見えた。

エリゼさんにしても…今日の出来事は予想外だったのだろうか…

「ちよつと…あんなことがあったから…寝れなそうです」

「…そうね」とため息一つ付くと、

「ベッドに横になるだけでも違うわ…良かったら私と一緒に寝ましようか？」

私の頭をそつとなでてくれた。

私は頷いてその優しさに甘えることにした。

「少ししたらエリゼさんの部屋に行きます」

一月二十五日

みんなへ書き残しておきたいことがあります。

だから今日だけちょっと言葉遣いを変えますが許して下さい。

私は今日改めて日記を読み返しました。

そこには私の喜びが書かれていました。

そこには私の哀しみが書かれていました。

そこには私の怒りが書かれていました。

そこには私の文字が書かれていました。

一つ一つの文字に、私の感情がこめられていました。

思い出が文字になって、この時の私と繋がっているのです。

そのことに気付いた瞬間、迎える最期の時が恐くなりました。

今ノームは、ここにいます。

文字に、みんなの思い出に、ノームは残ります。

だから、最期は満足は出来ないけれども、悔しくはないとは言えないけれども、決して絶望して死ぬことはなかったと思います。

私の死に顔は穏やかだったでしょうか？

たぶん苦痛に歪がんでいたとしても、心は穏やかだったはずです。

それを文字として残すことは出来ません。

だからその姿を、そしてもう日記に書き残せることはもう少ないですが、一文字一文字を私の思いとして一緒にみんなの中に止めていてください。

日記の頁が空白に近付いた。最後の頁らしい。弱々しい文字がそこに残されていた。

二月三日

今日 再び司祭がやって来た。

残されている日が少ないようだ。

遣言の代わりに葬送曲として私の好きなピアノ曲を指名する。そしてちょっとした仕掛けをお願いした。

きつと、誰かが気づいてくれるだろう。

私の最後のいたずらを笑って欲しい。
そこに私の意思を込めて。

日記はここで終わっている。最後に一行、曲名が書いてあった。

「この曲……知ってる」

私にやれることが、一つだけあったんだ。

(10)――

ぼんやりした頭を軽く振り、私は目を覚ました。カーテンを少し開けると空が赤く染まり朝日が顔を出そうとしていた。

隣ではエリゼさんは居心地悪そうにまだ寝ていた。それを起こさないようにそっとベッドを降りる。

自分の部屋に戻り寝間着から私服に着替えると、身を感じる寒気から少しだけ頭はすっきりしてきた。

少し物憂げな気持ちで鏡で身だしなみを確認する。寝癖なし、目の隈……これは化粧で隠せる――

「でも……やっぱ……眠いな……」

私はあくびをしながらふらふらと客間へ移動した。

「さてと」

一言つぶやいて、気持ちを切り替える。

そしてピアノの前に座り、動きの鈍い手首を振る。

大きく一息。

寒さでかじかんだ指先を慎重に滑らせ、私は演奏を始めた。

日記に書かれた曲は生命の誕生を祝う賛美歌だった。

風がそよぐような静かな旋律が終わると、今度は小川のような緩やかな小節が続く。

自然の情景を描いたその明るい曲調に、私は不謹慎にも笑ってしまった。

死を前にこの曲を指名したのはなんという皮肉……いや、きっとそ

れも望んだことなのだろうか？

何を願い、この曲を託したのか…私なら何を託するか――

「……」

楽譜を半分めくったところで私は、ある一音の違和感に気が付いた。

それは耳からではなく、指先から伝わる手応えによるものである。

私は演奏を止めて三回ほど鍵盤を叩いてみると、周りの音と比べてハンマーに引っかかりがあることが分かる。

賛美歌ではあまり使わない高音域に「なにか」があるのだ。

「私なら……」

ピアノをじっと眺める私。

おもむろに、ピアノの裏蓋を開けてみる。

埃が漂い私の鼻をくすぐった。ずいぶん開けられた様子がないようだ。

空気を入れ換えようとカーテンを開けると、空の赤みはすでに消え、日射しが部屋に差し込んでくる。朝が…やって来たのだ。

私は明るくなった部屋を見渡した。

不意に、ここで開かれていたであろう演奏会の情景が浮かぶ。

ノームが、あるいは呼ばれた演者がピアノを弾き、使用人達と主人であるグリフさんが談笑し……そう、ウィツさん辺りがへたくそな歌を歌って場を明るくして――

そんなことを考えながらピアノの奥をのぞき込むと、そこには思った通りの物がそこにあった。

「やつぱり……」

ハンマーと弦の隙間、ピアノとしての動きが妨げられないよう縦に挟み込まれている小さく折りたたまれた紙。

緊張の糸がはじけたように力が抜けていく。

破かないようそれを慎重に取り出して、私はその紙を小さく広げる。インクの臭いが微かに漂ってきた。

「…まだ」

これを読むのは後。そう心の中で呟いて私はピアノの前に座り直した。

蓋を床に置き弦の張りを軽く調節すると、私は演奏を再開した。先ほど浮かんだ情景が頭から離れない。そしてそれは感情を伴わず、私に涙を流させる。

私の心はノームのための葬送曲を弾くことに集中している。でも…哀しみとは違う…… なんとはいいいのか… 温かい気持ち心地よくもあり、不快でもあった。

「……」

ようやく曲が終わり、その紙…手紙を読むと、その後は何も考えられなかった。

何度も文字を読み返し、そこに込められた思いをなぞっていく。

「ジゼル…」

背後にはグリフさんが立っていた。

「おはようございます」

「…うん…おはよう」

私は頬を少し緩めせると、その仕掛けを教えることにした。

ノームが残した日記の存在…託された葬送曲…

それを弾くことで気付くことができた手紙…

その存在にグリフさんには動揺しているようだった。

「あの娘は…こういういたずらが好きだったんでしょうか」

「そう…だったね」

彼は口元を歪めると、言葉を出すのも辛そうになんとかそれだけ呟いた。

「手紙は3通…これは、グリフさんへ宛てられています」

目の前で手紙を広げ中身を読み上げる。私はノームのようにしゃべることを心がけた。

言葉の一つ一つが、思い出として流れ込んでくるようで、そうすることは簡単だった。

伝えなくてはいけないことがたくさんありすぎて、困ってます。
あなたを愛していること。

世継ぎを作れなかった私を許して欲しいこと。
私とあなたの時間がかけがえ無かったこと。

最近はおあなたの顔を見ると胸がつまって何も言えなかったこと。
たぶんあなたがそれに戸惑っていること。

そして痛みで穏やかな最期を迎えられそうにないこと。

それがきつと、あなたの心に大きな傷を残すだろうということも、
私は気付いています。

でも大丈夫だとも信じています。

私がこの世から離れて覚えていられなくても。

あなたがそこにいる限り、この家に手紙に日記に、思い出に私が
いる。

私はそう思えてから何も恐くなくなりました。

そして今のあなたを見ているとちよつと心配です。
すぐに忘れてとは言わない。

けど、私のために自分を壊すのは止めて欲しいという私の願い
です。

これを読む頃には、私がこの家からいなくなって少し時間が経っ
ていると思います。

きつと苦しかったでしょう。

きつと悲しかったでしょう。

でも私が自分の死を受け入れたように、あなたにもそれを受け入
れて欲しい。

そのための言葉は思いつかないので、こうして私の思いを書き残
しておきます。

あなたが私がいなかったことを受け入れるまで、何度も読み返してく
ださい。

私はいつまでも、あなたの思いの中にいます。

「手紙はここまでです」

ひと言呟いて私は手紙を渡そうとした。

「こんなに…愛されていたんですね……」

グリフさんは無表情のまま固まっていた。差し出した手紙を受け取れないで震えている。

「ご存じの通り…私は孤児でした、肉親もいなければ……大切な人もいません」

私は俯いて、少しかすれた声で自分のことを語り出した。

「自分は教会を出てから、いつのたれ死んでも仕方がないと思ってました。どうせ誰も悲しまないし…それでよかったと思います」

その言葉を吐く自分に嫌悪を覚える私。

そう、そうじゃないんだと今なら分かる気がする。

「でも…ここで働いて、誰かの役に立つことは悪くないことを知りました」

グリフさんの目を見た。生気を失った悲しい目が、微かに泳いでいる。

もう少し……あと、少しだ…

「それに人が死ぬことがこんなに悲しいことを知りました。

生けることがこんなにすごいことも知りました」

だから…と、私は片手で彼の手を掴み手紙を無理矢理渡す。

「ノームの亡骸に非道いこととして、心を壊さなくていいんです」

そしてそつともう片方の手をグリフさんの手の甲に覆い被せる。

それは祈りの光景にも似ていた。

「私に非道いこととして、心を壊さなくていいんです」
ちよつとくさいかな…

でも、私のこれは司祭の語り口だ。

そう、嘆き悲しむ遺族の前で、穏やかに神の言葉を語る司祭の言葉――

私には神の言葉を語る資格はないけど、ノームの言葉は伝えられ

る。

「心を壊せばノームのところに行ける。

心を壊せば……あなたの身体が消えても恐くない。

そんなことはないんですよ」

「……」

「ただノームを……残された家族を悲しませるだけです」

私が語り終えると、グリフさんは膝から崩れ落ちてしまった。

「なんで……僕は」

隠していた気持ちが噴きだしたように、グリフさんの目から涙がこぼれ落ちる。

きつと自分が何をしようとしていたか……今まで気付いていなかったんだと私は思った。

心の置き所が行き場のない袋小路に陥って、最後に自分を壊してしまうことにも――

「もう、終わりにしましょう」

私は自ら屈み、グリフさんを抱き寄せた。

その時、エリゼさんの言葉を思い出す。ノームが死んでも泣かなかった。

その人がノームの手紙に泣いている。

「辛かったんですよね」

そうずっと耐えてたんだ……

ノームへの想いと自分に課せられた義務の狭間で、愛する人の死を受け入れられず。

きつと……どうしていいのかわからずに――

(11)――

落ちていたグリフさんを一人にすると、残りの手紙を台所に置き、私は街へ出かける用意をした。

私……つまりは「ノームの人形」がない状態で、みんなに静か

な時間を過ごしてもらおうという、私なりの気遣いである。

髪型を変えてから初めて降りた街では一騒動あったのだが……それは巻き込まれた司祭様の尽力に甘えて、私は教会で時間を潰したのだ。

夜中に館に戻ると、そこは灯りもなく静まりかえっていた。台所に散らばっていた酒瓶は片付けられ、朝置いた手紙もなくなっていた。

置きっぱなしだった日記も、どこかに消えていた。

唯一、ピアノだけが蓋を開けたままになっていた。私はそれを元に戻すと自分の部屋に戻り燭台の灯を消す。

暗く静かな夜……この日は久々にぐっすり眠れた気がする。

「…ふう…」

目が覚めてベッドから降りると、私は机の上にエプロンドレスが綺麗に畳まれて置かれていることに気付く。寝る前はそんな物はなかったので…誰かがここに置いたのだろう。

そう……人形の役割は終わったんだ。

エプロンドレスに着替えると、私は大きく息を吸って無理矢理笑顔を作る。

今日は鏡に映る自分が初めて自分のように感じられた。

「エリゼさん、ウィツさん。おはようございます!」

食卓に入るや否や、私は大きな声で挨拶し一礼する。

「おはよう」

少し戸惑いながら二人が笑いかけてきた。

「…おはよう、ジゼル」

そこにはびっくりしたことにグリフさんもいた。

どこか居心地が悪そうにしながらコーヒーを飲んでいる。

「グリフさんが朝に起きてるなんて、珍しいですわね」

思わず私は軽口を叩いてしまった。

「朝食をとられるなんて何年ぶりですか」

エリゼさんも私の意図を察したか、明るい口調で問いかける。

「今日は、ここで食べたい気分なんだよ」

グリフさんはくすりと笑い、朝食に手をつける。

「ジゼルも早く食べなさい」

「はい」

早々と食事を済ませたウィツさんは食器を下げて皿洗いの準備を始めている。

エリゼさんが今日の掃除と買い出しについてメモを書き、グリフさんは公務に向けてパンを食べながらと書類をめくる。

そう…誰も…昨日までのことには触れない。

不覚にもジワリと涙がこぼれてくる。

「みんな…ありがとうございます」

ぼそりと呟いた私の言葉に一瞬、空気がひんやりとした。

「あら…何かあったかしら？」

でも、ウィツさんが表情を変えずにそう言い切った。

みんなと目が合う。無言のうちに視線を交わし、頷き合う。

「いや…何となくお礼を言いたかった気分だけです」

私の言葉に少し口元を歪めながら、それでもみんなは何事もなかったように返答した

「変なの」

「そうだね」

「はは…変ですね、私」

私も含めみんなが何か、憑き物が落ちたように日々を取り戻したのだ。少しぎこちないが、しばらくはこうやって「いつもの朝」を作ろうと心に決める。それでいいはず…

「さて、今日は忙しくなるわよ」

エリゼさんのかけ声で食事を終えた私たちは館のあちこちへ散らばる。

でも夜にはまた食卓を囲み、語らい、少し仕事する人もいて、そうやって日々の営みを終えるわけだ。

私の…家族――

そんな言葉が、私の脳裏によぎったのは初めてだった。

【終章】暖かい日射し

その日は晴天だった。

目まぐるしい日々のも最後として、ノームの葬儀が行われた。

鎮魂の鐘が街に響き、高台に作られた墓地には多くの人々が集まっていた。

そしてその葬儀は、もはや教会に属してない自分が仕切ったのだ。かなり異例のことだが、司祭は私以外にふさわしい人間がいなかった。はつきりと言ってくれたのだ。

着慣れた……でも久しぶりに袖を通した修道服に身を包み「神の言葉」を語る私。

そして同時に私の思いを私の言葉で伝えることも出来たと思う。

この街に来て、偶然私とよく似た一人の少女がいて、その娘の思いを手紙で、あるいは日記で知って……

ただ、そんな風に起こったことを飾らず語る。

でも埋葬が終わる頃には、私は……私の知らないあの娘を思って泣いていた。

少し不思議なことにグリフさんは泣いていなかった。ノームの棺桶に土の蓋がかけられている時間、彼はただじっと目を閉じその音に聴き入っているようだった。

「……」

とても長い時間……一人二人と人々が街に戻り、私たち四人だけがその場に残された頃、グリフさんは小さく「帰ろうか」と呟いた。

「そうだね……」

私は無意識に答えていた。

「あら」

不意にエリゼさんが私の手を指差す。

「あつ……」

この時私は、グリフさんがいつの間にか私の手を握っていたこと

に気が付いた。

「ご…ごめん」

私たち二人は弾けるように手を離す。

ずいぶん長い間グリフさんに触れていたのか手の平はじんわり汗ばんでいた。

「世継ぎは急がなくてもいいですよ」

「うつ…」

からかうようなエリゼさんの言葉に私の顔は真っ赤に染まっていた。

「そういう冗談は、僕の大切な人のお墓の前では止めてほしいな」

グリフさんは少し頬を緩めると、穏やかな声でそれに返す。

目を真っ赤に腫らしながらも、エリゼさんもウィツさんも、つられたように明るい笑顔を見せていた。

「うつ…みんなして……」

女性陣から向けられる好奇の目線に照れながら、私は改めて彼の顔を見る。

そこには、あの日私に見せた狂気の目はもちろん無かった。

やっと……みんなの時間が動き出したんだ――

「行こう」

そう言つと、グリフさんは館の方へ足を進める。

みんなはゆっくりと家路に向かって行く。

私は一瞬歩みを止め、空を仰いだ。

「これでいいだね…ノーム？」

もちろん答えはなかった。

みんなの中の彼女が、きっと、それぞれに答えているのだらうと信じて……

私はみんなを追いかけることにした。

(終)――

【終章】暖かい日射し（後書き）

【あとがき】（ちょっとネタバレあり）

お読みいただき本当にありがとうございました。

もともと縦書きで書いていたものをこのサイトに即して横書きで読まれる前提で改行いじる必要があると思い試行錯誤しましたが、読まれる環境が自分でチェックできないので……そういった意味も含めすいません、読みづらい点が多々あったかと思っています。

とりあえず本作品は「生きてるって何だろう」という、テーマに基づいてます。

まずキャラが出来てテーマを考えたときに、死に行く人がどう死と向き合うか…それを周りがどう関わるのかを考えたときからこの話の制作は始まります。ノームが死ぬ前にジゼルと会っていたとして…ノームがうり二つのジゼルに自分を託して壊れていく、そういう過程を書きたかったんですね…本当は。

でもなんかしっくりいかないところに、視点を変えてみて「残された者はどうする」かについて考えていたら……

天から「剥製をお使いなさい」と声が降って、原案は吹き飛び一ヶ月で長編が書いてしまいました。テンションにかまけてネットに晒すということまでやってみました。

死を受け容れるまでの葛藤を描き、狂気に走り、狂気を正す過程の中で、自分なりに「生」を間接的に表現しようと思ったわけです。

（初期構想は「日記」という形で残りましたが、個人的に固まっていたノームのキャラに不憫な思いをさせてしまったなあという後悔も残ります…）個人的には何とかおもしろい作品に仕上がったと思います、いかがでしたでしょうか？

こんなよく分からない小説を書く私ですが、まだ御機会有ければこ

ここに掲載していきたいと思います。

今後の参考にさせていただきますので何かしらのご意見等ございましたらお気軽に評価・感想等いただければ幸いです。

掲載後思いの外アクセスがあり、少しびびっていたりしますが…今後の糧とさせて頂きます。

最後に、重ね重ね作品をお読みいただきありがとうございました。

2011/01/11 - 12

アカウント制作と投稿。

2011/01/15 - 16

改行と節番号の表示方法を改訂。

2011/01/22

挿絵追加

2011/02/25

レイアウト一部変更

2011/04/04

レイアウト調整

2011/08/11

新作の構想がほぼまとまりましたので、8月後・9月頭をめどに今度は連載方式で作品をつづてみようと思っています。もしご興味がありましたら、そちらの作品もよろしく願います。

2011/09/04

連載始めました。こちらもしろければご覧ください。

<http://ncode.syosetu.com/n4104w/>

この作品の「ウィズの明るい版」がヒロインの現代ものですw

n
t
a
k
u

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1046q/>

冷たい人形のほほえみを

2011年9月5日03時22分発行